

平 泉 文 化 研 究 年 報

第 2 号

平成14年3月

岩 手 県 教 育 委 員 会

序

岩手県では、中尊寺金色堂に代表される平泉の文化遺産を総合的に調査研究しその成果を広く公開し活用していくため、平泉文化を研究する機関を整備していくことを検討しています。

現在、この研究機関の整備をすすめるための条件整備を図ることを目的に、平泉遺跡群の中核遺跡である国指定史跡「柳之御所遺跡」の発掘調査を進めるとともに、平泉文化研究に必要な人材の発掘と育成、研究者相互の連携や多角的・学際的な研究の推進を図るため、平泉文化に関する共同研究の実施などにより、研究基盤の整備と拡充に取り組んでいます。

昨年度から開催している「平泉文化フォーラム」はこの取り組みの一環として現在の平泉文化研究の現状について広く情報を発信し、多くの方々に平泉文化研究に身近に接して頂くことを目的としているものであります。

併せて、平成13年4月、「平泉の文化遺産」が世界文化遺産の暫定リストに記載されたことは、広く県民にとって喜ばしいことであります。今後、当フォーラムを継続的に開催することにより、世界遺産本登録に向けて平泉文化に関する県民の学習と理解の場としての役割も果たすよう、更に充実した内容を模索して参りたいと考えています。

この「平泉文化研究年報」は、「平泉文化フォーラム」で御講演いただいた西村幸夫先生のお話の内容と共同研究に御協力いただきました諸先生方の玉稿をまとめたものです。今後、更に当年報が広く多くの研究者の方々の御参加を頂くことにより、平泉文化研究の中核的な誌面となることを目指して参りたいと考えています。本誌がいかばかりなりとも、文化財保護と平泉文化研究の発展の一助となれば幸いです。

最後に、共同研究に参画していただきました諸先生方、御多忙中、基調講演を御快諾いただいた西村先生、御協力をいただきました平泉町をはじめとする関係各位の皆様に深く感謝申し上げます。

平成14年3月

岩手県教育委員会

教育長 合 田 武

目 次

序

基調講演	「歴史的遺産を活かしたまちづくり」	西 村 幸 夫…………… 1
------	-------------------	----------------

平泉出土の貿易陶磁

一柳之御所跡出土の韓半島産陶磁器から見える流通経路一

降 矢 哲 男……………15

白河・鳥羽・平泉

吉 田 歆……………25

東北の経塚 一分布傾向からの考察一

八重樫 忠 郎……………35

平泉出土土器の認知考古学的研究

前 川 要……………45

1 本書は岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課が実施している「平泉文化研究機関整備推進事業」の一環として発刊するものである。

2 本書には、平泉文化に関する共同研究者の研究成果と「第2回平泉文化フォーラム」当日に行われた基調講演の内容を掲載している。

フォーラムでの研究発表者は公募により選考しており、平成12年度から14年度まで研究を継続する中堅研究者3名と、年度毎に公募する若手研究者（主に学生を対象とする）1名からなる。

平成13年度平泉文化フォーラム発表者

前 川 要（富山大学人文学部教授）

八重樫 忠 郎（平泉町教育委員会文化財調査員）

吉 田 歆（東北大学工学部助手）

降 矢 哲 男（九州大学大学院学生）

平成13年度平泉文化フォーラム基調講演発表者

西 村 幸 夫（東京大学大学院工学研究科教授）

3 本書の編集は岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課の斎藤邦雄、佐々木務、戸根貴之が行った。

歴史的遺産を活かしたまちづくり

西村 幸夫

皆さんおはようございます。私は、専門が都市計画でして、歴史を生かして、そしてどうつくっていくかという事が専門です。今日はその意味では、歴史そのものが専門ではないので、この後専門の先生方の様々な研究発表を楽しみにしております。

私は、ただ都市計画といっても道を作って、建物を作って歴史を壊す都市計画ではなく、歴史を活かした都市計画をやるべきではないかということを以前から思っていて、その意味では学生時代から少数派でした。時代が変わりますと、そういう事が大事だといろんな方が言ってくれるようになりまして、ようやくやる事が出てきたかなと思っています。今日はそういう意味で歴史的遺産を活かしたまちづくりについてお話をしていきますが、その前に、世界遺産の委員会のことが出ましたので、そのことを簡単にご紹介したいと思います。

世界遺産を登録するにあたっては審査があります。その際、登録の書類を各国からユネスコの世界遺産センターに持っていくわけですが、ここに持っていかれた書類は文化遺産と自然遺産に分かれてそれぞれの専門組織で審査することになっています。日本でも文化財が登録あるいは、指定される時には文化財の保護審議会が開かれますね。それと同じようなシステムですが、日本の文化財保護審議会は審議会そのものが調査するというものではありません。一方、世界遺産の場合は、それぞれの専門の組織が上がった申請書類をチェックして、現場にいった調査をするというように具体的に調査をすることになっています。文化遺産に関しては、イコモスという組織がそれをやっています（国際記念物遺跡会議、International Council on Monuments and Sites）。私はそこで執行委員をやっているものですから、毎年世界遺産の評価に立ち会っています。今年も4月にありましたが、今、世界遺産が700以上になっている折から、あまり増やすのはやめようということになっています。あまりたくさんの件数を審査に出してはいけない、それぞれの国はたいてい最高1つまでしかダメということになっています。かなり厳しくなっています。なおかつ、今までであるようなものはもうやめよう、これから出すにあたっては、今までにないようなものにしないとだめである、特に数の多いところはそうにしないといふわけですね。ですから、2000年は実は67の世界文化遺産の申請があったんですが、今年は13しかありませんでした。来年以降世界文化遺産あわせてだいたい30以下になる予定です。13の中でもこれはだめだ、来年も書類を引き下げるべきだというようなことを言ったのもあります。

今年はハンガリーのブダペストで、世界遺産委員会が6月に開かれます。ブダペストの一部分が世界遺産の追加登録の協議対象になっています。20世紀にできた道路と公園とその下に通っている地下鉄をセットで、追加しようと議論が進められています。ブダペストそのものの街はもう世界遺産になっているのですが、それは昔からのお城



講演されている西村幸夫先生

がある中世以来の街の部分でありまして、20世紀の部分は今までは世界遺産の外でした。世界遺産には中心部とバッファゾーンという緩衝地帯がありますが、その外でした。そこにはヨーロッパ大陸はじめての地下鉄が引かれています。世界で最初の地下鉄というのは、ロンドンですね。これは1880年代から90年代にかけて作られています。蒸気機関車が地下鉄を走るんです。信じられないでしょう。蒸気機関車がポーと煙を出す穴があって、そこだけ空が見える。煙が上がって、その勢いで走るわけです。地下鉄といっても我々のイメージとはぜんぜん違うわけです。

20世紀に入って、ブダペストがはじめての電気で動く列車の地下鉄で、地下鉄の駅もたいへんおしゃれで大きな駅なんです。それをセットにして世界遺産にしようとしています。これが認められますと、地下鉄が入るのは初めてなので、非常に面白い。その意味で、今までにない視野を広げていこうということがあります。

平泉は平成12年に暫定リストに載ったわけですが、私も暫定リストに載ったときの委員会の委員をやっています。議論に参加させていただきました。10人ぐらいの委員で、平山郁夫先生とか石井進先生と一緒にだったんですが、今までと同じのはやめようというのが世界の流れでありまして、日本としても、今までと違うものを考えました。今まで、というのは、例えば、お城ですとか神社、仏閣です。お寺だけというのはもうやったんじゃないか。だから違うものをやるべきだという議論がベースとしてありました。その議論の中で、3つが暫定リストに追加されました。1つは熊野古道です。これは吉野の山とそこに行く参道です。これは、お寺というよりも、山が信仰対象であり、そういうことを大事にしよう、ということなんです。こういう発想というのは、実はヨーロッパにないですね。非常にアジア的です。つまり、山そのものが聖なるものである、ということです。ですから、こういうのを選びました。

実は今年もイタリアから聖なる山というのが申請に出ています。中身を見てみると、全然日本と違います。Monti Sacri イタリア語で聖なる山という意味なんですけども、山全体が聖なるものではなくて、そこに約12か所のキリストの物語の祠があって、これを回って拝むんです。ですから、それは日本でいえば88箇所めぐりが山の中にあるようなものです。1つ1つの祠があって、それを回ることが信仰だということです。小さい祠とセットになっている雰囲気すごくいいということです。実はヨーロッパの人は、山で聖なるものという、そういうものが置かれているのが聖なるものというイメージがあるんです。それは、我々と全然違ってまして、日本人にとってやっぱり山は富士山のように、山全体が信仰なんです。山を御神体にするような信仰があるということが当たり前です。でも、それは、世界から見ると当たり前じゃない。ですから、逆にこういうのは非常に面白いものの考え方です。世界遺産としてやることは、日本のためだけじゃなくて、世界全体から見たときにこういうものの考え方もあるんだという意味で大事だということから提供しようということなんです。日本だけの発想ではなかなか通用なくなっています。

それからもう1つは石見銀山。これは島根県の大田市の山奥に銀山があります。それは今、遺跡になっています。江戸時代の初めぐらいにピークを迎え、ピークの時代には世界の約1/3を産出していたたいへんな銀山でした。そこはある意味で、世界の銀相場を変えてしまったぐらいのところ。山の中に銀山ができて、1時期は20万人以上の方が銀を掘るためにそこに住んでいたんです。今は廃墟です。廃墟ですけども、随に1つの集落が残っています。そこで銀山から出てきた銀を、鑑定し、幕府に納めていたわけです。そこには奉行があって武家がいって、そして都市があります。そこには生活を支えるための商人がいます。山のほうには、職人がいます。そういうワンセットのまちが今でも残っています。大森といいます。そこは、今人口で500人しかいません。かつては20万人以上住んでいた今は500人しかいない。そこが、歴史のある

古い感じのまちとして残っています。それ全体をワンセットとしてやろうとしています。これは、いってみれば産業遺跡です。それを産業だけじゃなくて、それを支えてきた行政をセットにしてみることがおもしろい。産業遺産というのは、世界中いろんなところで産業遺産として、文化財として文化財指定されていたり、中には世界遺産になっているものもあります。しかし、大半の世界遺産は、だいたい炭鉱ですとか、金山ですとか、割合19世紀以降の近代的な技術で作ったものが多いです。石見銀山のように16世紀にピークを迎えるような、非常に長い歴史、それがまだ残っているというような産業遺産というのは少ないわけです。世界的にみても、産出量が世界の銀の1/3というぐらいですから、結構な価値をもっています。ですから、世界的にも意義があるということで選ばれたんです。

平泉はなぜかという、日本の中央文化とは違う、この地域にしかない文化というものがここに生まれていることが、日本の文化を考える時に非常に重要だということなんです。一昨年、沖縄の琉球王国のグスク及び関連遺跡群が選ばれています。沖縄には沖縄の文化があります。琉球王国として独立し、そして沖縄本島以外も含めて200以上のグスクと呼ばれるお城がありました。そのうちの主要なものを取り上げまして、それと庭園、墓、それから拝所などセットで9箇所を世界遺産に申請して登録されたわけです。日本がこれをやった理由は非常にはっきりしておりまして、日本の文化というと京都や奈良とか、そういうところから始まると思われてますが、そうではない文化の広がりを実は日本は持っているんだということです。特に琉球は、日本と違う国であったわけです。独立していたわけです。言葉は日本語ですけども、琉球王国として独立していて、中国にも単独で中国の皇帝に進貢してたわけでありました。ですから、違う文化であり、その文化の広さを世界に示すことが日本にとって非常に大事で、同時にそれは世界の中で見ても、日本に違う文化があるということをきちんと示すということが重要であるということです。元々暫定リストに載っていましたが、世界遺産としても認められたんです。

そういう面でいうとアイヌの文化で、ちゃんとした遺跡があったらまず真っ先に暫定リストにのるべきです。それが残念なことにアイヌの文化で、これほどきちんと残っているものがないので、なかなか暫定リストにのれないということがありました。

その時に色々議論をしまして、この3つが元々原案の中にあったのですが、日本の中で暫定リストにのせるべきものはもっとあるんです。例えば最初からいわれているのが富士山です。富士山は山ですけども、日本の様々な文化に影響を与えているわけです。絵画、版画に影響を与えています。また、信仰の対象にもなっています。浅間信仰という富士山自体を御神体として、浅間神社とか、浅間大社や、たくさんの大きな社があります。その意味ですごく大事です。富士山は風景ですけども、風景を超えた文化です。これを文化的景観Cultural Landscapeといいます。こういうのは90年代の初め頃までは、これは風景なんだ、これは守るといっても、そこに文化があるとして、何を守っていいかなかなかよく分かりにくいと考えられていました。富士山はどこまでが富士山なのか、富士山の下まで行くと工場があります。そこまで富士山なのか。富士山という聖域を作っちゃうわけです。庭だったらこれは風景なんです。庭の風景、これは、造られた庭だから、これが大事だというのが分かるわけです。日本の場合は、借景があったり、今言ったような富士山そのものが、信仰の対象であったり文化のエネルギーの元であったりする訳ですから、もっと広いわけです。どこまでか、線を引くのが難しかったり、そういうものの考え方が、ヨーロッパには少なかったのかなかなか認められなかったわけです。それも1992年から世界遺産としてこれも大事だということになりました。だから本当は暫定リストにのせるべきですけども、富士山には環境問題があるわけです。トイレのし尿も手いっぱい、なかなか処理しきれないというようなことがあって、環境問題を解決するまで待とう

ということなんです。

それからもう一つは非常に重要、大切だといわれているものに伊勢神宮があります。これは確かに日本の中では非常に重要で、世界的に見ても、20年ごとに建てかえるのは、普通の文化財では考えられない話です。たいへん日本的です。非常に大事です。でも伊勢神宮そのものが文化財ではないんです。文化財になるのを拒否しているって感じなんです。けれども、そういうところも時代が変わってきつつあります。伊勢神宮も国指定の文化財にならなくても世界遺産になる機会がなくはないので、そういうことになっていくんじゃないかと思うのですが、今の段階ではうまくいっていません。

以上の様な意味で広くやっついこう、その為に暫定リストを広く取っついこうということなんです。実は昨日の夕刊、日経新聞に、アフガニスタン暫定政権カルザイ氏が昨日パリで記者会見をしまして、バーミヤンの石仏を世界遺産に登録したいという事をいっています。バーミヤン遺跡は、壊されましたけれども、壊される前から暫定リストにのっていたんです。ユネスコとしてもあれは守りたいと考えていました。今回壊す4・5年位前から、壊すということをタリバンが言っていました。それに対してユネスコの総会で、これは守るべきであると決議までしました。惜しいかなやはり暫定リストは拘束力がない。世界での関心も低かったわけです。ユネスコがバーミヤンの石仏を壊すなど決議してからしばらくは何もしてないんです。なぜかというマスコミも全然報道をしてないから。タリバンにしてみれば、何をしても報道しないわけです。世界のみんなが、アフガニスタンを見捨てているわけです。彼等は、自分たちのほうを向かせるために、石仏を『壊すぞ壊すぞ』といって本当に壊しちゃったんです。その直後に、CNNの独占インタビューに答えていたことがあるんですね。『何故壊したか？あなた方はこれまで我々のことを何も報道しなかった。バーミヤンの石仏は大事かもしれないが、自分たちの国の子供達が、飢えと病気でたくさん死んでいるんだ。』と、それは軍事的に国が閉鎖されているからです。それは自分たちの軍事政権をアピールしていることもあります。『でも人道的にも無視されている、そういうことを全然報道しない。一方、仏像破壊についてはものすごく報道している。それは間違っているんじゃないか。』というのが、彼等の意見です。この問題に対して即行動をしなければならない。これをやるのはやっぱりユネスコしかないんです。

破壊されてしまったバーミヤン遺跡ですが、どうするか、様々な意見がありまして、ひとつは壊されたまま世界遺産にしよう。壊されたことが生かされる。原爆ドームみたいなもので、つまり負の遺産です。もう一つはもう1回現代の技術で、完全に復元して復元したものを世界遺産にしよう。それからもう一つ、復元してもそれは壊れたものはもとに戻らないから、そりゃマズいぞと。でも元に戻したいということもあるわけですから、壊されたものはそのまま残して、復元は隣でやって、壊されたものをみせながら昔はこうだったというのを見せよう、という考えと、3つの考え方があります。どうするかを今、議論しておりまして、おそらく今年のうちにこの問題の専門家の会合を持とうという事になっております。現場で見て議論しないと分からないわけですから専門家、それも石の専門家、仏教仏像の専門家、それから復元の専門家、そういう人が集まるということを今計画している段階です。その中で、議論・結論を出すべきです。外から、現場を知らないで結論を出すのはやめようというのがイコモスという我々の組織の姿勢で、そういう風にユネスコでも言っています。現場といっても、敢えてそういうところに行く人たちはテントで寝泊りしなければならないかもしれません。ですから、非常に厳しい。安全上も厳しい状態なのでどうなるか分かりません。けれども、現場を見て現場で議論しなければならないんじゃないかと考えております。

それでは次に歴史的遺産を活かしたまちづくりについて、具体的にどうやって、今考えなきゃいけないの

かみていきます。

今この会場の場所も、世界遺産に申請する場合には、緩衝地帯・バッファゾーンの中に入ってきます。このまち全体もバッファゾーンの中に入ります。このまちが本当に世界遺産のまちとしてふさわしいということはどういうことであるか、何をしなきゃいけないかということです。お寺や庭園が立派であれば、まちが何をやっても良いということにはならないんです。それにふさわしいまちじゃないと、目の前になんかすごいものがあって、門を入ったらお寺だからいいでしょ、そういうことではありません。ならないはずです。なっちゃいけないわけです。そういうときにまちの中はどうしなければいけないか、という議論をしなければいけません。

ちょうど同じような状況が鎌倉にもあります。鎌倉も暫定リストに載っていますが、暫定リストに載っているのが先ほどこいつた新しく追加された3つ以外に鎌倉と彦根城があります。鎌倉の場合は特に、京都や奈良と3つ同じような内容で決まったわけですけど、京都・奈良はそれなりに国宝、文化財やお寺がありますけど、鎌倉はそうは無いんです。もちろん円覚寺舍利殿などがありますが、町としては、近代的なまちなんです。しかし、鎌倉の町にきちんとしたものが何もないじゃないかと。町は観光客が約1,000万人以上来るようなところですよ。そんな町として若宮大路のまわりは高さを15mに抑えましょうとか、住宅地は高さ8m以下にしましょうとか様々なルールがあるんですが、これはルールだけです。どこにも規則しか書いてないんです。いわゆる行政指導です。それが嫌だという店があると、裁判では負けるんです。しかし今のところは、守ってもらっています。しかし、本当に世界遺産にふさわしい町にするには、それはルールだけで、単に市役所が願うからということでは良いんだろうか。また、観光客がいっぱいて、今でさえパンク状態なんです。町をどう改善するか、もっとふさわしい町としてどうあるべきか、町の人がそれを知らない。町がどんなに必要でどんなものが大事で、その大事さを守るにはどんなことをやったらいいかということを知らない。規制が入るだけで厳しくなるのは嫌だということでは変わらないんです。商店街でもこれ以上の規制がはいると困ると規制に反対なんです。ですからこれからどうするかという問題が鎌倉にはありますね。

そのためには住んでいる人たちが、この町がどういう意味があって、どういう事が大事かっていうことを知らなければいけないわけです。どういうルールがあったか。それを守るためにはどれくらいの事をやらなきゃいけないのか。そのためにはお願いだけでは済まなくなるかも知れない。でもそのことは単に規制されるだけでなく、非常に良い環境の町を作ることへの逆転の発想になるわけです。つまり、本当に歴史が感じられる町になることです。それはお寺の中ではなく、お寺に行くアプローチに雰囲気があって、その中にあるとその町の歴史が実感できる町にしないといけないですね。お寺までは見ないで、そのまま見過ごすことになるわけです。そういうのはよくない。そのために、こういうフォーラムがあるわけです。それはこういう町だけでなく日本中がそういうことをやらなければなりません。自分たちの歴史文化を考えていかなければならない、と考える訳です。

そのことをスライドでご紹介しようと思います。まず最初に世界遺産の候補地でも何でも無い町をご紹介します。これは大分県の緒方町という何でも無いといったら失礼ですが、普通の山あいにあります。この山を抜けますと竹田という滝廉太郎の住んだ町があり、『荒城の月』のモチーフになった有名なお城があります。その手前にある小さな町です。自然が豊かな緒方川と周辺に広がった盆地があって(写真1)、町はその端っこのほうを街道沿いにずっと並んでいるんです。ちょうど山の縁です。そういうところに昔からある小さな町なんです。こういう小さな町ですが、まちづくりをするためたいへん熱心に活動しているグル

ープがあります。そのグループの人達が「緒方町ふるさと自由塾」という、まちづくりの民間のグループなんです。山村さんというメンバーの一人が次のように図を作りました（写真2）。

これは何かというと、自分たちの町の人々が住んでいるところは小さな三日月型の盆地であり、その盆地が本当は色んな意味で大事ではないかということであらわしています。ここに滝があり、この滝が非常に大事じゃないかとか、山沿いに水路が流れていて、その水路から水を取って田んぼが山の両側にありますが、その水路がこの豊かな水田を作っているわけで、非常に大事である。そういういろんなことを自分たちで見つけてきています。例えば農業の導水はすごく歴史が長いわけです。井路（いろ）と呼ばれる田の用水は歴史の上でたいへん大事です。田んぼに水が行くわけですから止めてはいけません。ですから長く続くわけです。ここは阿蘇山の麓で溶岩がいっぱいありますから田に石がたくさんあります。逆に、石の文化もいっぱいあるわけです。自分たちの町は日ごろ、当たり前に思っているなかにそういう歴史が、石の文化があると気付くわけです。

また、この町には父宮・母宮・兄宮のお宮が3つありまして、家族3人の宮ですね。その家族お宮のおみこしが年に1回、集まるお祭りがあります。そのお祭りが、すごく大事なこの町のお祭りなんです。川の両側にあったお宮が、川岸で集まります。その川原はすごく大事な場所であるはずなんだけど、町の人にとっては、すごく当たり前で、その大事さに気がつかなかった。しかし、見ているうちに大事だと分かってくるんじゃないでしょうか。そういうことが、町を大切にしていくことの基本にあります。

これは原尻の滝という滝です（写真3）。川の実ん中であって非常に面白い滝ですね。これが大事だとは皆知っているわけです。これが見えるように遊歩道を作ることになったんです。橋を架けたのですが、この周辺は御覧のように実に何もありません。ですから目立つ橋をこうい



写真1 大分県緒方町全景



写真2 山村さんが作成された図

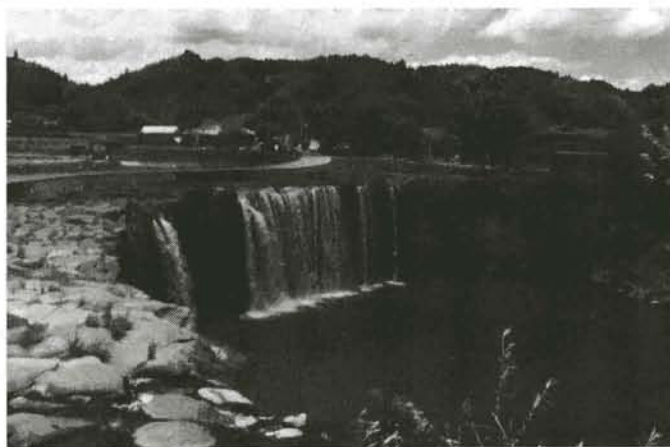


写真3 原尻の滝



写真4 石橋



写真5 風景



写真6 石橋



写真7 石の祠

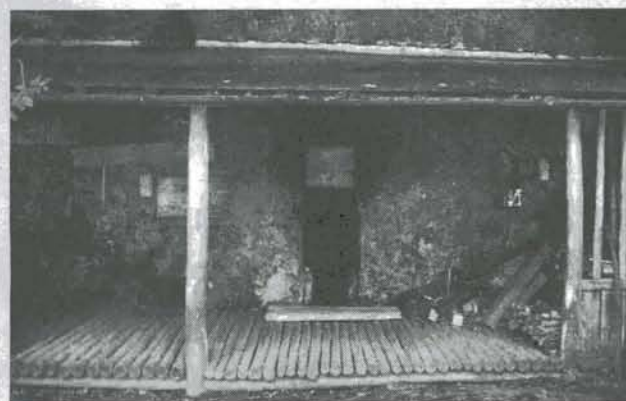


写真8 石風呂



写真9 水路と水車

ろに作るのは何か変だ、ということですからごく低いところを通る橋にしました。増水すると橋の上が川の中に入ってしまう潜水橋ですね。それは橋の景色を守るために色々考えているわけです。

この町にこういう石橋があります(写真4)。先ほど申し上げたとおり山の縁に歴史的な道があります(写真5)。石橋は本当は大事なんだけど、実は大分県にはもっと石橋の多い町があります。この町はナンバー2なんです。そうすると、町の人たちはナンバー2だと石橋とか、石の文化とかいえないじゃないかと、考えてしまうわけです。一番っていえないからちょっとこれは何かうまくないと考えてしまいます。

石橋ですが、こういう石橋です(写真6)。でも石橋だけじゃなくて色んな石の文化があるんです。こういう石の祠があったりするわけです(写真7)。そういう物が全体にたくさんあります。石橋に限らず色んな物が見えてくるわけです。これは石風呂です(写真8)。薬草を敷いて、石風呂に入って火を焚きます。そういう石の文化は日本にはなかなか無い。ここは子供の体験の石風呂になっています。地元の人も今いったような、個々のものは面白いと思っているわけですが、自分たちの町全体としての石文化、という感じではなかなかとらえられていません。

これは町民のマラソン大会ですがここに水路と水車があります(写真9)。この水路そのものにすごい歴史があると考えています。この町にはすごく大事なものがあるのです。そういうものに今まで気がつかないんです。古い所だけでなく新しいところでもこういう水路ができています。

それともう1つこの町には、町の中にお盆の送り火に代わる松明を置く風習があるんです。ちょっと小高いところに集落があって、峠を越えるとういう景色が見事に見えて(写真10)、このお盆の送り火が、1つのイベントなんです。自分たちの町が三日月型の盆地であるということを素直に生かす、こういう送り火の風習を昔からずっとやっているわけです。それがすごく大事である。単なる送り火という以上ですね。この町の構造が実は大事だということなんです。

先ほどいいました、原尻の少し上流の川べりに不思議な鳥居があるんです(写真11)。水が増えると水の中に入ります。これは何でしょうかと地元の人たち聞いてみました。すると、これはさっきお話しした3つの宮の神輿がここに集まるんですね。その時に対岸から来る神輿は鳥居を渡って川を渡ってここに集まります。3つの神様が集まる、まさに文化的風景なんです(写真12)。町の人にとっては、こういう儀式は儀式としてあるんですが、これが周りを含めて全体としてすごく重要だとなかなか気付かないんです。

先ほどの滝ですけど、観光客にいかに見せるか、ということから滝を下流から見せようと。この鳥居はすぐ上流にある訳です。よくよくこの町のことを考えると、上流のほうがすごく大事なところなんです。つまりここはちゃんとした広場なんです。聖なる場所なんです。そしてまた周りの田



写真10 お盆の送り火に代わる松明



写真11 川べりの鳥居



写真12 川を渡る御輿

んぼや農地の風景と川の風景を如何に大切なものとして、こういうみこしの渡御を大事にするような背景、舞台としてどういうものにするかという風に考えていくことが大事です。町の基礎として何が大事なんでしょう、そしてそれを具体化させていく骨格は何であろうか、どの道が大事なのか、どこから見た風景が大事なのか、皆にどのように見てもらいたいのか、ということが見えてくるわけです。先ほどの水路ですが、そういう風に見ないと見えてこないわけです。つまり町のある歴史を今ある方向から読んでいくと、結局、そこに色んなもの、大事なものを取り出してきて、光を当てる、ということから、町にとって何が大事かっていうことが見えてくるんです。ということが一つあります。

もう一つの例をご紹介します。先ほどいった暫定リストのもう1つの文化遺産、石見銀山です。場所は島根県大田市の山の中(写真13)、ここに昔は20万人ぐらいいた、銀山川という川の中流の山あいに行行政の町として大森があります。今は人口500人になってしまいましたが、一番元気があります。この大田市の中で一番元気があります。町の一番外れの、一番古い町ですが非常に元気があります。山の中に史跡がありまして(写真14)、川沿いに町がありまして川の下流のほうには武家地があります。この辺に奉行所があります。こういう町です(写真15)。なんてことない小さな町です。ここに様々なグループがあり、婦人会・子供会など全部で50くらいの団体があって、いろいろな活動をやっています。そのうちのいくつかをご紹介しますと思います。まず1つは小さなお店です(写真16)。これは本当に古そうな店ですけど、実はすごくおしゃれな Cotton の店なんです。外からは見えないでしょ。これは BURAHOUSE といいます。ここに看板がかかってます(写真17)。よく御覧にならないと分からないですけど、これはミシンの看板なんです。これは Cotton の雑貨をつくっている店なんです。しかし、表はこの歴史的な雰囲気や上手く生かしている。これは面白い。中はすごくおしゃれなカフェで(写真18)、中庭を見ながら、向う側に銀山川が流れています。このようにすごくおしゃれな Cotton や小物を置いています(写真19)。昔の土間を上手に生かしています。この店は小さな店なんですけども、年間5万人から10万人とかなりの人が来ています。一番近い大きな都市が広島ですが、広島から高速道路でわざわざ2時間かけてこの店に来る人達がいるんです。それは表を見ると実に歴史を生かしています。この店は何かこんなに人気があるかというと、この店にははっきりしたコンセプトを持っています。まず、たのしい田舎

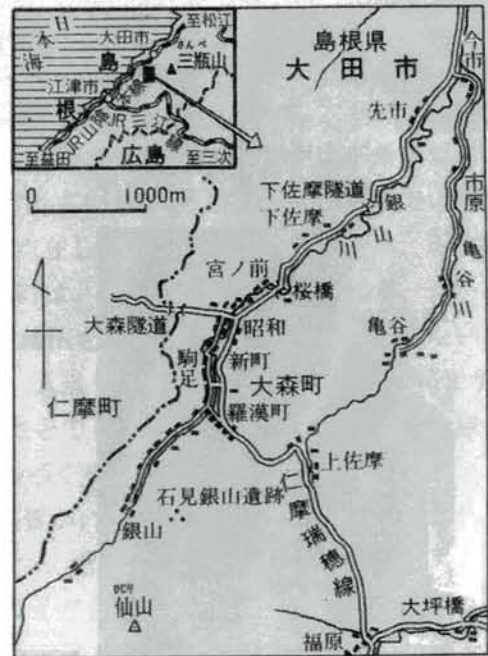


写真13 石見銀山の所在地

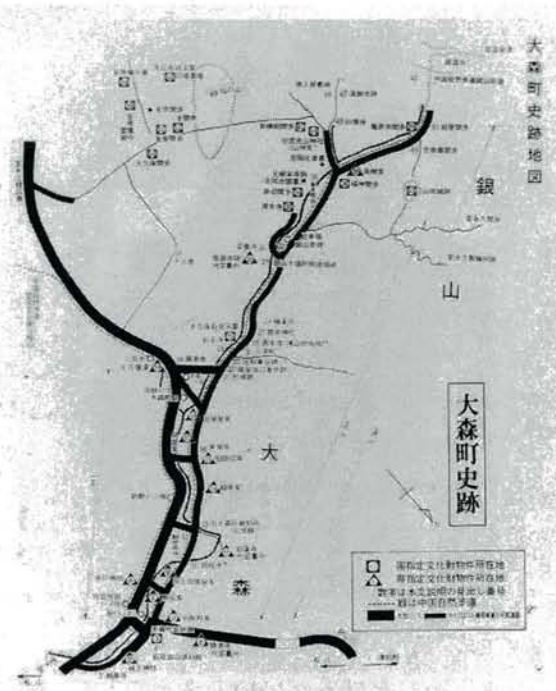


写真14 大森町史跡地図



写真15 町並み



写真16 BURAHOUSE 正面



写真17 BURAHOUSE 看板



写真18 BURAHOUSE 内装 (1)



写真19 BURAHOUSE 内装 (2)



写真20 BURAHOUSE 中庭

暮らしがあること。そしてお母さんが自分たちの娘にこんな服を着せたいというのを作ってらっしゃいます。ご主人がこの出身なんです。1回大阪に就職して出て行ったんですがUターンで帰ってきたんです。奥さんにパッチワークの趣味があったんですがデザイナーとして、こういう風に色んなコトンの小物や洋服を売りたい、その時にコンセプトとして、こういう町だから歴史があって、自然があるから、そういうものを生かしたほうがいいと考えたわけです。実は奥さん、たいへんデザイナーとして優れた方なんです。御主人と一緒にこの町に帰ってくる時、こんな山の中で、流行のものが見れない中でデザインが全然

浮かばな
にやっ
つもない
うすご
す(写真
て、鉄の
フレッ
「私
りは石
1万貫
いわれ
はひっ
で町並
舎だか
何もない
しなが
これが
という
活かそ
ってく
業」と
て欲し
色ん
トのひ
す。こ
性が自
祭りで
りぐら
男性が
けです
後の飲
非常に
やった
これ
す。こ
婚20年
そうい
の時に
準備し

浮かばないんじゃないかと、ご主人は非常に心配したわけです。流行のものが見れないところでおまえ本当にやっていけるかと奥さんに聞いたわけです。奥さんは、いや全然違う、このとてつもない歴史と、とてつもないすばらしい自然があるからこそイマジネーションが湧いてくると答えたということです。そういうすごくはっきりしたコンセプトで店作りをして、商品造りをしているわけです。これはその家の中庭です（写真20）。中にはすごく面白い金属のモニュメントがあります。高校の美術の先生がこの町に住み着いて、鉄のモニュメントを作っています。BURAHOUSEの宣伝のパンフレットの一節を読みますと普通のパンフレットと違うんです。

「私達の住む大田市大森町は、東西に長い島根県の中ほどの日本海側に位置しています。大森町というよりは石見銀山という方がなじみがあるかもしれません。700年という長い歴史を持つ石見銀山が最盛期には1万貫の銀を産出し、宝の国としてマルコ・ポーロによって紹介されています。当時20万人が住んでいたといわれる古い町並みには、代官所、武家屋敷、商家、郷宿などが点在し、栄華がしのべられますが、現在ではひっそりと500人足らずの町になりました。一挙に廃墟と化した町は、余計な変化にさらされず、おかげで町並みは自然な形で残されています。こうした背景を持った石見銀山をこよなく愛し、他ではできない田舎だからこそできる心の温まる町づくり、ものづくり、心や、木、人造りをモットーに日々励んでいます。何もないように見えたこの町に、なんと多くの宝が隠されていたことでしょうか。日々宝の発見に驚き感動しながら、この町でしか表現できない、この町でしか作れないものづくり、それが私達のねがいです。」これがBURAHOUSEの宣伝コピーです。すごいでしょ。こんなに品質がいいとか、こんなにデザインがいいということではなくて、この町にはこんなすばらしいものがあって、自分たちはこんなすばらしいものを活かそうとしている。それが自分たちの企業としてのコンセプトなんだっていつているんです。それを分かってくれる人に対するお手紙とする、これが新しい最近の企業のスタイルなんです。これを私は「生き方産業」といつているんですが、自分達はこういう生き方をしているんだということを分かってくれる人が来て欲しい。そういうところに多くの人が来るようになるんです。

色んなイベントがありますが、イベントの基本は自分達が楽しいということなんです。ユニークなイベントのひとつに、鄙のひなまつりがあります。今年で10回目です。今年は4月の26・27日にやることになりました。これはひな祭りを「鄙」、田舎でやるんですけど、なぜやるようになったかという、自分達の町に女性が自由に主人公になってやるお祭りが無いという事に気付いたんです。祭りは色々あるけれどみな男性の祭りで、女性はいつも裏方だと、それでいいのか。自分達が主人公になるようなお祭りはないのか、ひな祭りぐらい自分達のお祭りにしたい、女性が主人公になったお祭り、イベントなんです。ですから裏方は全部男性がやっています。つまり男性軍が託児所を作るわけです。子守りから食事の用意まで、このイベントの後の飲み会の用意も男性がやり、女性がお客様という非常に面白いイベントなんです。最近、男性も良くやったということで男女一緒にやっております。

これはですね、近所の女性たちが中心になっています。この日はこれから結婚するというカップルと、結婚20年目のカップルが何が大事かということ話し合うそういうイベントをやっているわけです（写真21）。その時に食事を出すんですが、自分の郷土料理を会場で準備して出す予定にしていたんですが、こういう日だけ

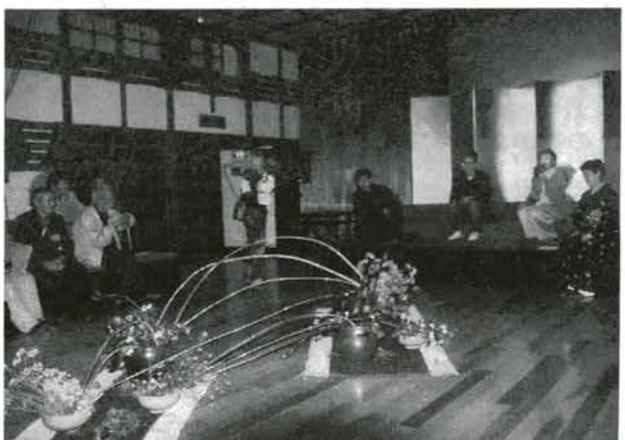


写真21 カップルが話し合うイベントの様子

ら見てもらおうと。これはお婆ちゃんです。地元の押し寿司(写真22)ですがこういうお寿司を上手く皆さんで作ってそれを葉っぱをお皿代わりにして食べるんです。2次会はこんな感じです(写真23)。

何でこんな事やってるのか。こういうところは田舎なので、空家がたくさんある。老人がたくさんいるわけです。普通だったらマイナスに、それはちょっともうお年寄りばかりで町に元気がなくなってもうダメと考えるのが普通ですけども、彼らは全然逆でして、これはこの町にはすごい可能性がある。逆転の発想ですね。空家がたくさんある。じゃあ、その空家を借りたり買ったり上手く使おう、という事でその人に一軒を借りる。地元で元々住んでいるから信用があるわけです。この家はゲストハウスです。たくさん家があるわけですから、ゲストハウスを一軒ぐらい、昔からの生活をやってみたい人を集めてやるような所を作ろうと、表の方はこういう風にして、ロウソク・炭火で食べよう。面白いですね。こういう遊びができるわけですね。これをやる事によって、例えばこの町にあるBURAHOUSEにきた人達の商品の展示会をやるんです。その仲買人を呼んで、そういう人が来て泊まるわけですが、その時にこういう場所でもてなす。もてなす時にこうやると。ここを見てこの場所を見てもらう。いかに自分達が本気で自分達の町の歴史を生かして商品作りをしているかという事を仲買人はわかってくるわけですね。これは偽物じゃないと。単に遊びで、コンセプトだけで、古いものをやってるんじゃないとわかるわけですね。こういう遊び心もある。こんなのは空家がたくさんないとできないですね。空家があるのは色んな事に使える。大変な可能性がある。

もう一つはお年寄りです。実はこの店は手作りのコットンの商品というのが売りなわけですから、手作りの物があるんですね。アップリケが付いているとか、色んな刺繍が付いてるとか。ぬくもりがある。機械ではできないですね。本当に手作りの文化。そういう手作りの文化を地元のお母さん達、お婆ちゃん達が内職でやってるわけです。なんとその大部分が100~150人からの組織なんです。色んな仕事が家でできる。お年寄りの人達にとってみると、外に出てパートをやるよりも、自分の家で好きな時間にやり、それがちゃんと収入になるわけです。ですからこのBURAHOUSEにとって空家があって、お年寄りが、お母さんお婆ちゃん達が大いに、たいへんな資源になる。そういう発想の転換をして、なおかつこの歴史がある事を活かして活動してるんですね。こういう町の人達を中心にまた行政の人達も入って町作りの会があります。たくさんある会の一つに I L P G、IWAMI LOCAL DESIGN PLANNING GROUPの略です。これはす



写真22 押し寿司を作る風景



写真23 2次会の様子

ごく面白い会で、彼らはグループで同じデザインの名刺を持ってるんですが、対象分野がこう書いてあります。「自然環境・計画工学・町並保存・建築環境・インテリア、空間装飾・ファッション・ライフスタイル工学・男女間研究・人間交流学・郷土愛促進学」、半分遊びが入ってるわけですけど、まだまだあります。彼等のモットーは『私達は感じます。考えます。行動します。創造します。交流します。そして感動します。』という会なんですね。そういうグループが集まって、別に会費はないけど、半分飲み会をやっている。こんな事をやりたい、こんな店があったらいいんじゃないか、こんなスペースがあったらいいんじゃないかという事を実現しているわけです。例えば先程あったお店の二階は三間続きの空間がある。そういう所をぶち抜いてチェロのクラシックコンサートをやる、そういう事をやるんです。それは本当にそういう空間があるからできるわけですね。

こういうカレンダーを発行して(写真24)、全員集合カレンダーと名付けて、新たなる物語の序章という事で、普段皆が居る所をもって、We are here. 私達はここにいる、っていうスタイルで作って皆で配っています。毎年、この家族はどこかに行ってしまうかもしれないけど、この時期にここに居た、という思い出になる。というカレンダーをもう10年続けて作っている。

私が言いたいのは、自分達の町の歴史をうまく活かして、今の生活をいかに魅力的にしているか。その時に本当に歴史を活かしてこういう



写真24 全員集合カレンダー

事をやっているとわかるような、それは自分達の持っている物を活かしていけばできるんじゃないか。そういう意味では色々な、例えば水路ですとか石造りの橋ですとか、お祭りですとか、昔からの技術ですとか、色んなものを現代に見れるんじゃないかと。さっき言った緒方町のように、名もない所が、大切なのです。そして、昔からの松明を使った送り火が、見方を変えれば、自分達の歴史をたいへん活かしている事がわかった。その世界が、町が、もっと世界が幅広くなるんですね。何も世界遺産になろうというわけではないのです。この町に色んな、例えば空家がある、それをマイナスと考えないで逆転の発想で、お年寄りが宝と考える。空家が宝になる可能性があるから、これを活かすことが何かないかと考える、という事が今回のテーマです。それはまだまだもっと豊かな発想ができるんじゃないかということですね。BURAHOUSEとか、石見銀山で活躍している全然別の企業が中村プレイスですね。プレイスっていうのは、身体障害者の補助器具なんですね。義手・義足・人工乳房とかを作っている会社なんです。考えてみれば、義手とか義足、こういう物は技術さえあればどこで作っても売れるわけですね。ですから高い技術を持って、自分達の田舎に帰って、作って、今は東南アジアにも輸出している。ですからビジネスっていうのは、仕事っていうのはこういうものですよね。色々な可能性がある。上手く歴史を開く事ができる。もっとも可能性のある街づくりができるんじゃないかと。ですから私は、この町は様々な意味で可能性があると思います。その意味で、今ある物を本当に知らないで、次にいけないので、これから私も一緒になって様々な歴史について勉強したいと思います。で、その活かされる道は何なのか。今どう考えてゆくか。今は、例えば色んな道路を作ったり、色んな工事をするが、昔の物を壊したら意味がないので、何をしたら昔と一番共存できるか、プラス今の生活にも良くて、皆にも歴史を感じてもらえるか、という事を一緒に考えていきたいと思っています。

以上、言葉が少なかったですけど、スライドもちょっと中途半端ですけども、終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。



会場風景

「平泉

はじ
中
もの
な遺
の機
いる
ては
体、
てい
さ
討資
を行

1. 韓
遺
大宰
ける
遺
「九州
西谷
磁器
森
れな
期に
(森田

ま
を行
をも
にお
を見
の開
大き
ま
1類
がみ
形の

「平泉出土の貿易陶磁—柳之御所遺跡出土の韓半島産陶磁器から見える流通経路—」

降 矢 哲 男

はじめに

中世から近世にかけて、陶磁器は、その性質から絹布や穀物などといった土中において腐敗・分解するものとは異なり、腐敗することなく、遺跡の中に残り続ける。そのため、遺跡を研究していく上でも重要な遺物となっている。特に海外から輸入される陶磁器は、中世日本において、陶磁器本来の食膳具としての機能に加え、威信財としての機能も同時に持ち合わせることが、これまでの研究成果からわかってきている（小野1997）。しかしながら、食膳具や威信財としての機能以外、どのように使用されたかなどについては、不明な点が多い。その点で遺跡から出土するものは、当時の使用状況を反映しており、そのものの自体、および遺跡の性格、出土遺物の構成などから、総合的に検討していくことによって使用状況を解明していくことは可能である。

さて、本稿では、柳之御所遺跡の出土遺物の調査を行った際に見られた、韓半島産鉄絵青磁（註1）を検討資料として用いて、日本における韓半島産鉄絵青磁の様相を見るとともに、韓半島産陶磁器の時期区分を行い、そこから平泉へどのような経路でものの流入がなされたかを考察する。

1. 韓半島産鉄絵青磁について

遺跡から出土する韓半島産陶磁器の研究、特に今回取り扱う高麗時代の製品については、博多遺跡群、大宰府史跡・大宰府条坊遺跡から出土しているものを中心としていくつか行われている。まず、日本における韓半島産陶磁器の研究史を見ていくとともに、出土する遺物から編年、時期区分を行なう（註2）。

遺跡から出土する韓半島産陶磁器を用い、地域を網羅する形で研究を行ったものとしては、1983年の「九州・沖縄出土の朝鮮産陶磁器に関する予察」と題した、西谷正氏による研究（西谷1983）が挙げられる。西谷氏は、九州、沖縄の遺跡において出土がみられた韓半島産陶磁器を扱い、日本国内出土の韓半島産陶磁器の出土状況からVI時期に区分した。

森田勉氏は、主に大宰府史跡・大宰府条坊遺跡から出土する韓半島産陶磁器を用いて、象嵌技法が施されない青磁をⅠ期、象嵌技法が施される青磁をⅡ期、そして、粉青沙器が出現する以降をⅢ期とした。Ⅱ期については、胎土や釉調が優れている段階をⅡ-a期、胎土や釉薬が粗雑になる時期をⅡ-b期とした（森田1985）。

また、近年、森本朝子・片山まび両氏が、博多遺跡群から出土した韓半島産陶磁器をもちいて分類試案を行っている（森本・片山2000）。この分類試案は、片山まび氏が韓国国内の窯跡資料を用いて行った分類をもとに、それに博多遺跡群より出土した韓半島産陶磁器を合わせる形を取っている。これまで、生産地における年代観と消費地による年代観の違いが指摘されてきてはいるものの、両者の視点から同一の資料を見ることは少なかった。博多遺跡群における出現期の韓半島産陶磁器の年代観に関して、約半世紀ほどの開きがあることを指摘し、漠然としていた生産地と消費地との年代観の違いを明確な形で現したことは、大きな成果である。

まず、編年である。ここでは、型式変化を追うことができた瓶子を中心にみていきたい。（註3）。

1類としては、長崎県・大石原遺跡から出土がみられた、無釉陶器の梅瓶(1)がある。腰の部分はくびれがみられない。この類似品としては、伝世品ではあるものの、長崎県・木坂海神社所蔵のものに、瓜割形の無釉陶器の梅瓶がある。

	西谷 (1983)	森田 (1985)	森本・片山 (2000)	降矢
10c				
11c	I			
12c			I	I
13c	II	II - a	II	II
14c	III		III	III
15c	IV	II - b	IV	IV
16c	V	III	V	
	VI			

第1図 時期区分相関図

瓶	
11C	1
12C	2, 3, 13, 14
13C	4, 5, 15, 6, 10
14C	7, 8, 9
15C	11, 12

1. 大石原遺跡
 2. 京都大学構内遺跡
 3. 若宮大路周辺遺跡群小町一丁目325番地イ外地点
 4. 若宮大路周辺遺跡群小町一丁目106番1他地点
 5. 博多遺跡群高速鉄道C・D地区
 6. 別府若宮遺跡
 7. 三の宮遺跡
 8. 建長寺境内遺跡
 9. 上浜田遺跡
 10. 湯築城跡
 11. 博多遺跡群第46次
 12. 博多遺跡群第42次
 13. 平安京左京八条三坊七町
 14. 南広間地遺跡
 15. 佐志中通遺跡
 ※縮尺は不明、統一してある。

第2図 韓半島産陶磁器【瓶】編年

2類としては、陰刻牡丹文(2)、柳草木文(3)の梅瓶がある。肩がしっかりと張り、腰の部分がくびれる。この段階では、鉄絵のものも作られる。鉄絵青磁は、精製品と粗製品の2タイプに分けることができる。精製品は、焼成がよく、胎土が硬く焼き締まっている。表面に厚く、透明釉がかかる。文様については牡丹文など様々な文様が施される(13)。粗製品については、胎土がややぼそぼそとしている。精製品の釉調が緑青色であるのに対し、粗製品はやくすみがかった濃緑色である。文様は唐草文・草花文が主体を占める(14~15)。

3類では、前段階に比べて、やや肩の部分が広がりを見せる。蓮弁文や雷文などの文様が目立ち、面全体に文様を施すようになる。口縁形態はⅡ期に比べ、やや外反する(4~9)。

4類では、肩の張りがなくなり、丸みを帯びる。腰のくびれが急になる。文様は簡略化され、スタンプ文が多く用いられる。内面のロクロ目はきつく残る(11~12)。

以上の瓶子の編年を試みた。それをもとに、日本における出現期である11世紀後半から、15世紀後半までをⅠ期からⅣ期の4時期に区分を行なった(註4)。

Ⅰ期については、象嵌技法が出現する以前の時期である。釉調や胎土、そして重ね焼き(目跡)の有無から、精製品と粗製品の2種類に区分できる。大宰府で言う、初期高麗青磁はこの時期に入ってくる。文様については、基本的に素文であるが、陰刻文を施すもの、印花技法を用いるものもある。器種としては、碗、皿が主体である。年代については、11世紀後半から12世紀初頭とする。また、生産地において最初期とされる形態である、先蛇ノ目高台の製品(註5)については、確認することはできなかった。しかし、今後資料の増加に伴い、先蛇ノ目高台の製品についても見つかってくる可能性は十分考えられる(註6)。

Ⅱ期については、無文のもの、陰陽刻文の製品もみられるが、象嵌技法が主に用いられるようになる時期である。精製品が多くみられる。また、鉄絵を施す製品についても出現する。文様については、陰陽刻文の花文(牡丹文、唐草文など)、象嵌技法による文様がある。象嵌については、スタンプ技法のものは少ない。このほか、京都府・平安京左京五条四坊二町(洛央小学校)や長崎県・木坂海神社弥勒堂跡から出土している象嵌部分が、器面の大半を占める製品も作られる。この時期、日本で出土が多く見られる器種としては、梅瓶が挙げられる。年代については、12世紀前半から13世紀中葉とする。

Ⅲ期については、Ⅱ期に続き、象嵌技法が主に用いられる。器面全体に文様が施される傾向がみえる。陰陽刻を用いる製品はほとんど見られなくなる。また、象嵌部分については、スタンプ文技法が多く用いられるようになる。文様については、雨点文、圈文などが多用され始める。この時期に日本において出土が見られる器種としてはⅢ期と同様に、梅瓶が多く確認され、碗、皿については少ない。年代については、13世紀後半から14世紀中葉とする。

Ⅳ期については、高麗時代から朝鮮時代にかけての過渡期にあたる。高麗時代からの影響を色濃く残す象嵌技法を用いるものと、朝鮮時代の粉青沙器とが入り混じっている時期でもある。しかし、文様形態、器形ともにあまり違いのない両者を明確に区分することは、現在のところ困難である。Ⅳ期はⅢ期に続き、よりスタンプ文の傾向が強まると同時に、文様の簡略化が著しく進む。文様については、連珠文、剣先蓮弁文、如意頭文、雨点文などがある。器形は、碗、皿、八角鉢、ゴケ底の角鉢、盤、梅瓶など多様な器種構成を見せる。年代については、14世紀後半から15世紀後半とする。

上記のように韓半島産鉄絵青磁は、おおよそⅡ期に位置付けられ、粗製品と精製品の2タイプに分類することができる。

2. 日本国内における韓半島産鉄絵青磁の出土状況

日本国内より出土が見られる韓半島産鉄絵青磁は、現在のところ、10遺跡12個体が確認されている(表、第3図参照)。

韓半島産鉄絵青磁が出土する遺跡については、平泉、鎌倉、平安京、博多など中世前期を中心に栄えた遺跡である。これは、中世前期における、韓半島産陶磁器全体的な傾向と言える(降矢2000)。以下、出土遺跡ごとに見ていきたい。

柳之御所遺跡は、これまでの調査成果から、『吾妻鏡』に見える奥州藤原氏三代秀衡の政庁跡と推定される遺跡である。ここからは、Ⅱ期の粗製品の破片、8片が確認できた(第4図参照)。釉調は濃緑色、焼成は良好である。全ての破片が被熱の痕が見られ、風化による退色もあることから、確実にはいえないが、同一個体(多くとも2個体)と考えられよう。出土がみられた遺構は、共伴する中国陶磁や木製品の年輪年代測定などから、いずれも12世紀後半に埋没したと考えられる井戸(SE4・SE5・SE15・SE16など)である(註7)。これらの井戸は、遺跡全体のほぼ中央に位置し、直径35mほどの範囲に点在する。また、八重樫忠郎氏によれば、平泉の出土遺物について、これまでの調査傾向から、①同一個体の破片数が少ないこと、②同一個体のものと考えられる破片が接合されないこと、③広い範囲に同一個体の破片が分布することなどが、12世紀前半に位置付けられる遺物の特徴であるとされる。今回確認できた、柳之御所遺跡より出土した韓半島産鉄絵青磁についても、以上の傾向が当てはまる。

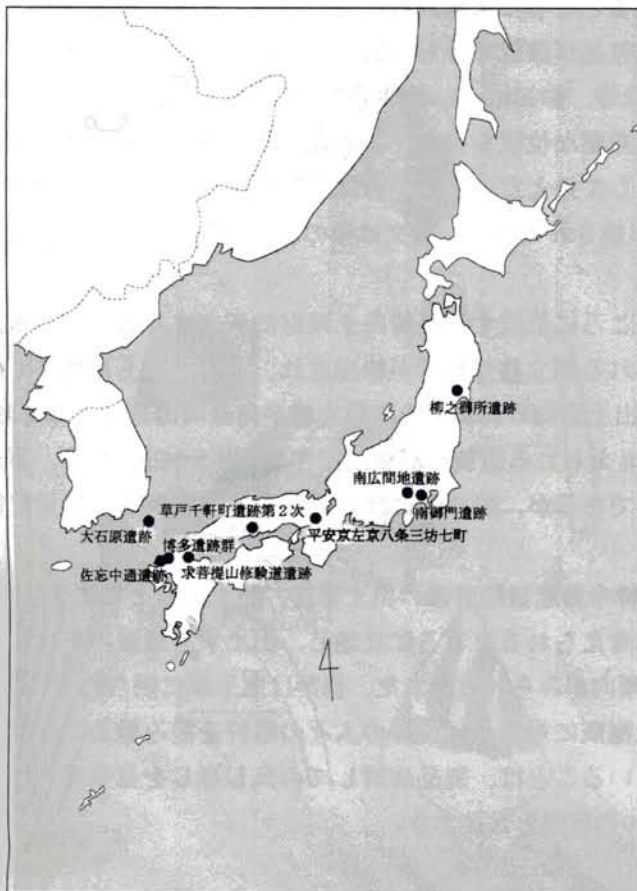
南広間地遺跡は、12世紀後半から14世紀中頃にかけて在地領主の伝・田村氏の屋敷を中心とした、複数の集落や水田を含む遺跡である。ここからはⅡ期と考えられる、瓶子が出土している(第5-1図参照)。この遺跡は、国府に隣接し、鎌倉街道沿いという交通の要所に位置している。この特徴は、宇津木台遺跡や多摩ニュータウン№509遺跡でも見て取れるもので、在地領主の屋敷、もしくはその周辺であること、Ⅲ期の梅瓶が出土していること、所有者と考えられる在地領主の家柄が鎌倉以来の名家であることなど、類似点が多い。

南御門遺跡は、推定大倉幕府跡の南側、また推定北条高時邸の東側にあたる場所に立地している。遺構は、掘立柱建物、溝、井戸などが検出されている。遺物については、12世紀後半から16世紀にかけてのものが確認できる。ここからは、Ⅱ期の精製品が確認できた(第5-1図参照)。器形は瓶子で、唐草文が施されている。13世紀初頭から中頃にかけてと考えられる、包含層から出土が見られた。

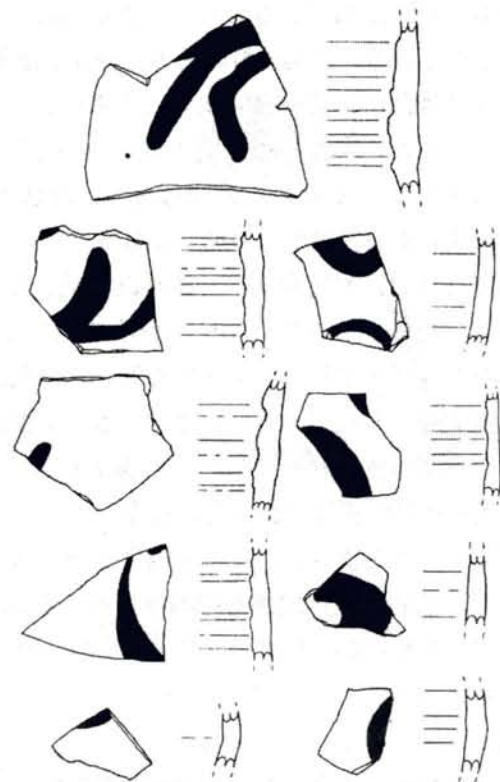
平安京左京八条三坊七町は、12世紀から13世紀にかけて美福門院の邸宅の一画と考えられる場所に立地し、周辺に平清盛、平重盛らの屋敷が存在していた。遺構、遺物ともに、9世紀後半から16世紀までが入り混じった状態で検出されている。ここからは、Ⅱ期の精製品が確認できた(第5-1図参照)。器形は瓶子で、草花文が施されている。13世紀後半から14世紀前半にかけてと考えられる、包含層から出土が見られた。

草戸千軒町遺跡は、広島県福山市を流れる芦田川の河川改修工事に伴い、発掘調査が実施され、鎌倉時代から室町時代にかけて繁栄したと考えられる集落跡である。ここからは、報告書の記載によると、絵高麗鉄絵と記載のある破片の出土が見られる(第5-1図参照)。実見できなかったため、詳細は不明であるが、写真などから判断すると、唐津産の鉄絵製品(もしくは、中国・磁州窯の鉄絵陶器の盤?)の可能性が高い。

博多遺跡群は、中世前期を中心として、ほぼ我が国唯一である、大陸との貿易港として栄えた遺跡である。そのため、日本の他の地域では見ることのない中国産陶磁器や、日本各地の土器・陶器類の出土も見られ、物流の一大集積地であったことは間違いない。ここからは、博多遺跡群高速鉄道祇園町工区、博多遺跡群築港線関係第3次の2地点より、各1点ずつ、粗製品が確認できた(第5-2図参照)。器形は瓶子、唐草文が施されている。高速鉄道祇園工区から出土したものについては、11世紀後半から12世紀初頭に位置付けられる遺構から出土が見られた。



第3図 韓半島産鉄絵青磁出土遺跡分布図



第4図 柳之御所跡出土の
韓半島産鉄絵青磁
(S=1/2)

地域	遺跡所在地	遺跡名	遺跡性格	出土器種及び点数	遺物の年代	文様・模様等	出土遺構	遺物備考	遺構についての備考	遺跡における遺構遺物の集積時期	参考文献
東北	岩手県西磐井郡平泉町字柳御所	柳之御所跡	城館	水注1	Ⅱ	唐草文	28地区 SE5・SE4・SE9・SK9	9片の出土が見られるが同一個体と考えられる。全て外面が被熱している。	全ての遺構について、共存する白磁・瀝美などの年代から、12世紀後半に出現し、廃絶したと考えられる。	12中～12後	『柳之御所跡』1995(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
関東	東京都日野市下田	南広間地遺跡	集落	梅瓶1	Ⅱ	鉄絵の草花文	212溝		龍泉窯1類の青磁碗が共存している。	12後～15後	森達也「東京・日野市南広間地遺跡と出土陶磁器」『貿易陶磁研究』No.1 1992 日本貿易陶磁研究会
関東	神奈川県鎌倉市小町	南御門遺跡	都市(武家屋敷)	瓶子1	Ⅱ	鉄絵の唐草文	包含層	内面のロクロ成たる層位に残る。	13世紀初頭にあたる層位からの出土である。	13初～14前	手塚直樹「鎌倉出土の高麗青磁」『三上博士喜寿記念論集 陶磁編』1985 平凡社
近畿	京都府京都市下京区堀小路通新町東入る東塩小路579-10	平安京左京八条三坊七町	都市	梅瓶1、碗1	Ⅱ、Ⅳ	梅瓶：鉄絵草花文、碗：圓文	梅瓶：2層、碗：SE1		全体に後世の攪乱が多い。SE1の共存する遺物については14世紀代と位置付けられる。	14	『平安京左京八条三坊』1982京都市埋蔵文化財研究所
中国	広島県福山市芦田川中州	草戸千軒町遺跡第2次	集落	梅瓶1、碗1、鉄絵?1	Ⅱ、Ⅳ	葡萄文、蓮弁文、草花文	不明	鉄絵青磁に関しては唐津産の可能性が高い。		12～16	『草戸千軒町遺跡 遺跡編』1965/『草戸千軒町遺跡 遺物編』1966福山市教育委員会他
九州	福岡県福岡市博多区	博多遺跡群高速鉄道祇園町工区	都市	碗10、小皿1、瓶子1	Ⅰ、Ⅳ	瓶子には鉄絵の草花文が施されている。	203号土壌、352号土壌			11後～12初	『高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅵ 博多～高速鉄道関係調査(3)』1987福岡市教育委員会
九州	福岡県福岡市博多区上呉服町1番地	博多遺跡群築港線関係第3次	都市	碗14、小碗2、瓶子1、梅瓶1	Ⅰ、Ⅳ		105号井戸、803号土壌、10号溝ほか			14～16	『都市計画道路博多駅築港線関係埋蔵文化財調査報告(Ⅲ)博多』1989福岡市教育委員会
九州	福岡県豊前市求菩提	求菩提山修験道遺跡	寺院	瓶子1	Ⅱ	草花文	不明		第9区より出土。	不明	『研究紀要』1 1979北九州市立歴史博物館
九州	佐賀県唐津市佐志中通	佐志中通遺跡	集落	碗13、瓶子1、鉄絵瓶子3	Ⅱ、Ⅳ	圓文、唐草文	包含層			13～15	『佐志中通遺跡』1997唐津市教育委員会
九州	長崎県上県郡上奥町屋敷畑	大石原遺跡	城館	碗5、皿5、小碗1、小皿2、瓶子1、破片25	Ⅰ、Ⅳ		SK1、SK4、SK3、SK5、SK7、SK8他			11後～12初	『大石原遺跡』1996上奥町教育委員会

表 韓半島産鉄絵青磁出土遺跡集成

求菩提山修験道遺跡は、かつて修験者たちが修業を積んだ山で、平安の最盛期には500を超える僧坊があり、隆盛を極めた山岳宗教遺跡である。山のいたるところに遺構が点在しており、国宝に指定された銅板法華経もこの山から発見された。ここからは、粗製品が確認できた（第5-1図参照）。器形は瓶子、唐草文が施されている。採集資料のため、流入した年代等、詳細については不明である。

佐志中通遺跡は、古代より大陸との窓口として重要な位置を占めている佐賀県唐津市に所在する遺跡である。中世においては、松浦党の活動の中心地として栄えた。ここからは、粗製品が三个体、確認できた（第5-2図参照）。いずれも器形は瓶子、唐草文が施されており、施文は他の遺跡の出土品に比べ、粗雑である。いずれも包含層からの出土である。

大石原遺跡は、対馬島北部、韓半島が見えるところに位置する長崎県上県町に所在する遺跡である。遺構は、11世紀後半から13世紀代にかけてと考えられる掘立柱建物群が検出され、それとともに数多くの中国産、韓半島産陶磁器の出土が見られた。また、出土遺物のおおよそ半数を韓半島産陶磁器が占めており、その器種構成も多様である。ここからは、Ⅰ期と考えられる粗製品が確認できた（第5-2図参照）。器形は瓶子、唐草文が施されている。包含層よりの出土であるが、時期的には、共伴する遺物から、11世紀後半から12世紀初頭の範疇でおさえられる。

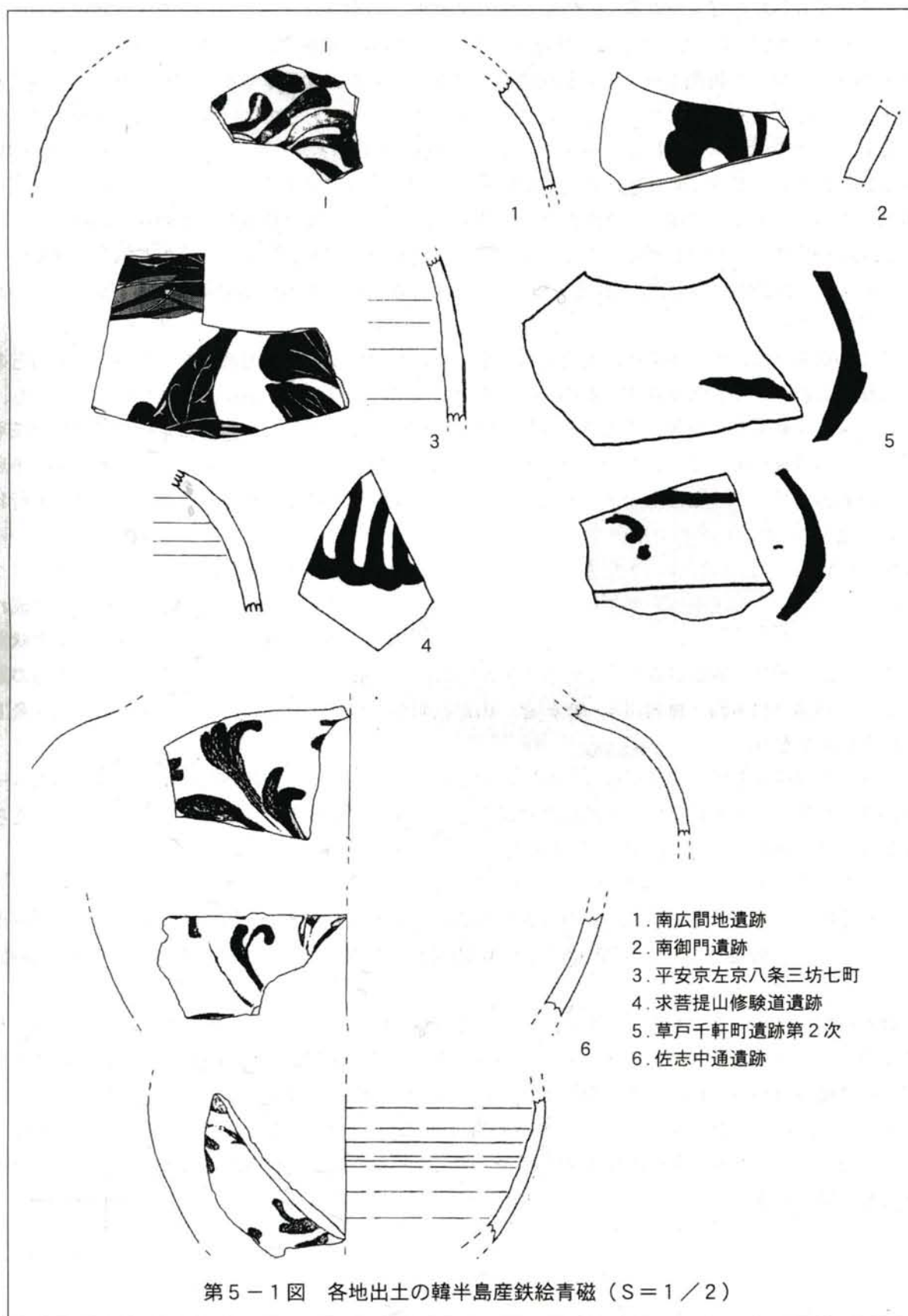
以上で見てきたように、日本国内においては、韓半島産鉄絵青磁の出土遺跡、出土点数ともに少ないが、いずれも政治的、経済的にもその地域の中心地と考えられるところに立地し、出土する遺構の年代も、おおよそ12世紀後半から13世紀代に入るといった、傾向がみられる。また、器形は瓶子類に限られる（註8）。この点は、絶対数の少なさもあるが、瓶子、特に梅瓶に対する、当時の人々の嗜好を読み取ることができるといえる。また、精製品が、平安京、鎌倉から出土していることは、製品に対しての良し悪しを見分け、当時の権力者たちが好んで良質な貿易陶磁を集めた、一つの証拠と言えよう。

3. 平泉への流通ルート

平泉においては、これまでの発掘調査により、柳之御所遺跡をはじめ、諸遺跡から多種多様な遺物の出土が見られる。また、奥州藤原氏が平泉に居を構えた時期が、11世紀末から12世紀後半と時期も限られることもあってか、出土する貿易陶磁の年代は概ね12世紀代のものである。近年の研究によれば、出土遺物の年代的ピークは、1150年頃から1189年までの約40年間であることが分ってきている（八重樫2000）。

さて、東北地方への韓半島産陶磁器の流入は、製品的に象嵌青磁の退化傾向が見られる時期であるⅣ期に入ってからであり、それ以前のものと考えられる韓半島産陶磁器の出土は、これまで確認されていなかった（註9）。

日本国内における韓半島産陶磁器の様相については、11世紀中頃から後半を初現として、北部九州地域を中心に分布が見られ、12世紀以降、徐々に全国へと分布域を拡大していく様子が見て取れる。韓半島産陶磁器の出土がみられる遺跡は、国府や寺院といった政治の中心としての機能を持ち合わせた遺跡が多く、また、出土遺跡の分布も平泉の出土遺物の年代的ピークにあたる時期（1150～1189年頃）には、多くが博多、大宰府、平安京といった政治・交易の中心地にみられ、その点から見ても、平泉からの出土が見られてもおかしくはなかった。とは言え、これまで東北地方において、韓半島産陶磁器の流入がみられる時期は、一番早いもので14世紀後半以降の製品（Ⅳ期）であった。そのような中で、個体数で言えば1個体（もしくは2個体）とは言え、遺跡の継続時期が限定される平泉内の柳之御所遺跡において、Ⅱ期と考えられる製品が見つかった意義は極めて大きいと言える。



さて、韓半島産陶磁器が平泉へ流入するルートの問題である（第6図参照）。柳之御所跡をはじめとして、平泉より出土がみられる貿易陶磁器、特に陶器類の傾向は、“遠隔地セット”といった出土状況を示すことが分ってきた（山本2001）。このことは、生産地から一旦、博多に荷揚げし、そこで積み替えを行ったことの表れであり、平泉への物流ルート（貿易陶磁器に限る）は、北部九州（博多・太宰府など）を一度経由して流入していることを意味していると言えよう。よって、ルートとしては、北部九州で荷揚げされ、①瀬戸内をとり、太平洋沿岸をまわるルート、②日本海側沿岸をまわるルート、そして、③瀬戸内をとり、一度平安京などに入ってから東山道を経る陸路ルートが、大きく考えられる。

東北地方から出土している韓半島産陶磁器は、現在のところ、Ⅱ期とⅣ期という時期の隔絶もあり、なかでもⅡ期については、柳之御所遺跡から出土した鉄絵青磁のみである。また、出土点数も、朝鮮時代の製品を含めても、100個体に満たない数である。よって、予測的部分を多分に含んではいるが、いくつかの点について述べたい。

これまでの研究において、平泉への貿易陶磁に限らず、ものの流入は、国産陶器の渥美、常滑などの大型製品の輸送に合わせて、太平洋側の海のルートをつかって行われたことが推測されている。しかし、現在においても、房総半島沖をまわる太平洋側の航路は流れが強く、危険な航路である。八重樫忠郎氏も指摘している（八重樫1999）ように、いったん東京湾に入り、陸路、もしくは河川交通によって房総半島を越え、再び海路を使うことなども考えられるが、平泉への荷揚げ地と推定できる石巻湾の湊の推定も行われていないことから、想定域をでない。

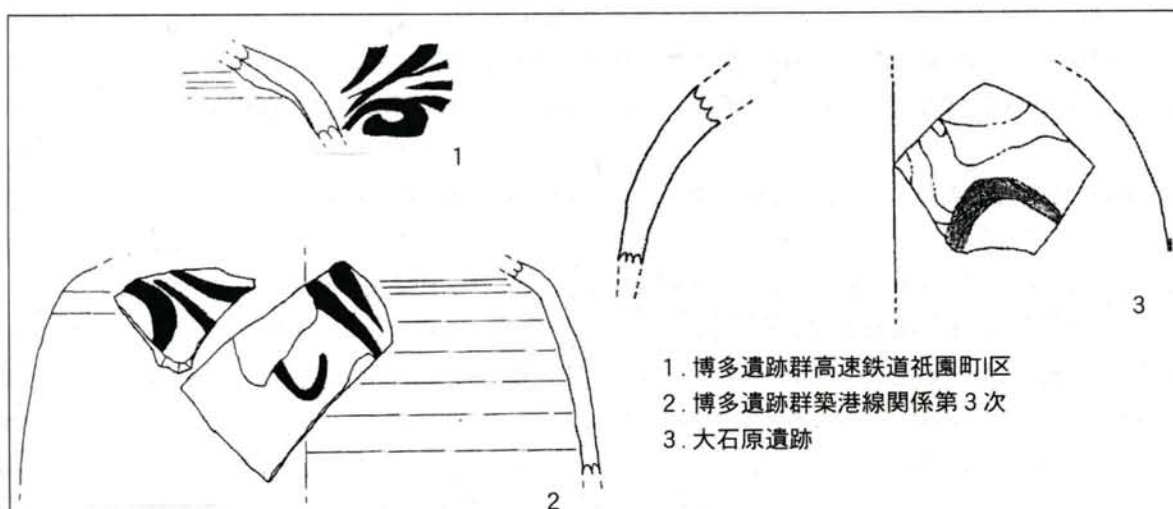
日本海側のルートについては、まだまだその根拠となるものが乏しく、近世になるまでその様相はつかめていない。とはいえ、近年の研究結果から、近世段階は確実に日本海側から太平洋側へのモノの流れがあることは分ってきている（註10）。Ⅳ期の製品が中心となるが、韓半島産陶磁器が出土遺跡の分布状況からも、河川に沿う形での遺跡が点在しているのが見て取れる（第6）。この状況から、秋田県側からの雄物川沿いにくる経路（日本海・雄物川ルート）と、山形県側からの最上川沿いにくる経路（日本海・最上川ルート）が想定できる。

流通システムが確立していく背景には、モノの需要があること以外に、前時代に用いられていたルートの拡充が考えられる。したがって、中世段階に近世と同じルートが使用されていることも十分に考えられることから、日本海側からの平泉への物流を考える上では、

積み上げ港 ⇒ 河川交通・陸路 ⇒ 平泉

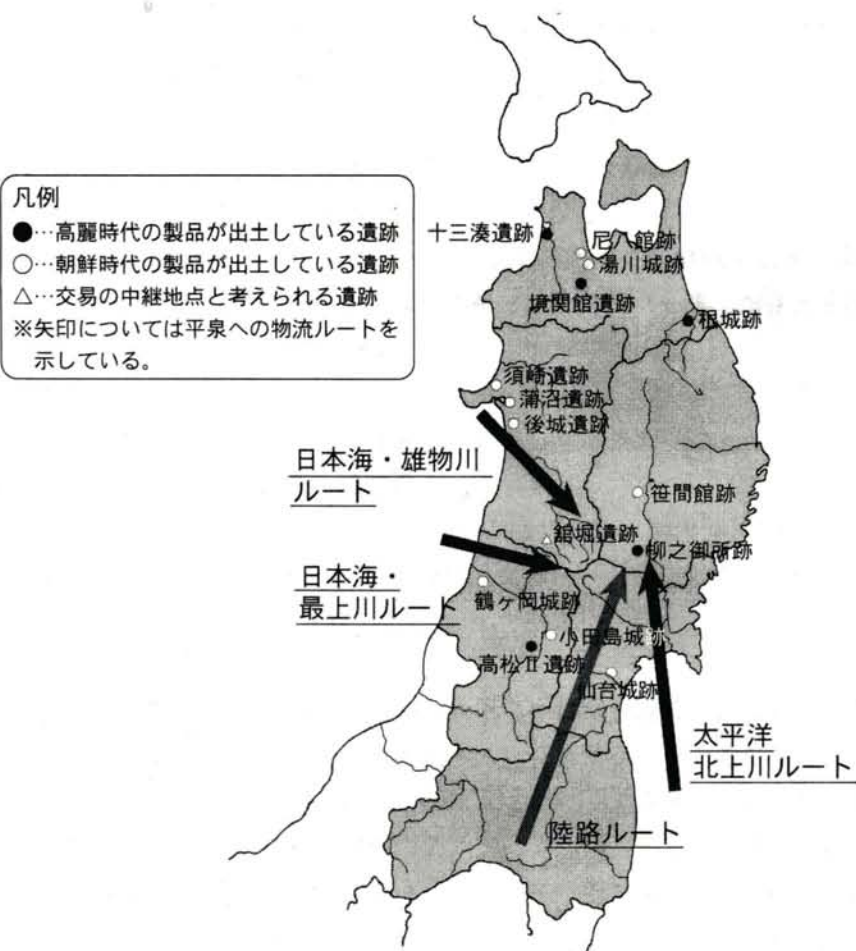
といった経路をたどることが想定される。遺跡の時期的な違いもあり、一概には言えないが、雄物川ルートで考えると、洲崎遺跡などの港湾遺跡から、館堀遺跡や観音寺廃寺跡などの拠点的な遺跡を通過し、平泉に入ることが考えられる。

次に陸路を用いたルートである。平泉から出土するかわらけの研究（松本1995）などから、当時、都であった平安京との密接な交流があったことがわかる。近年、荒井猫田遺跡をはじめとして、中世における道路遺構の発掘調査が行なわれ、考古学的に解明しようという動きが強まってきている（註11）。そして、これまでの研究から、北の“外ヶ浜”、南の“白河関”、そしてその中心として“平泉（衣関）”が位置していることが分かっており、奥州藤原氏勢力圏内での二次的な流通も、日本海ルートと関連して、今後検討を加える必要がある。



1. 博多遺跡群高速鉄道祇園町区
2. 博多遺跡群築港線関係第3次
3. 大石原遺跡

第5-2図 各地出土の韓半島産鉄絵青磁 (S=1/2)



第6図 東北地方における韓半島産陶磁器出土分布図及び流通ルート

4. まとめ

今回は、柳之御所遺跡から出土が見られた韓半島産陶磁器から、平泉へのモノの流通経路を検討した。しかし、筆者の力不足もあってか、韓半島産陶磁器の有無を明らかにし、分布状況を把握することは出来たものの、流通経路に関しては、詳細な検討を行なえなかった。以下に今後の課題を述べて、まとめにかえたい。

まず、韓半島産陶磁器についてである。今回は、鉄絵青磁を中心に韓半島産陶磁器の様相をみてきた。しかし、大きな枠組みは分った。しかし、詳細な点に関して、日本においては、出土遺跡、出土点数も限られてくることから、韓半島における生産地の様相を見ていく必要がある。

次に流通経路についてである。中世東北における日本海側のルートでは、遺跡から出土し、日本海側からの物流の根拠となりうるものと着目されるものとして、韓半島産陶磁器と共に、須恵器系陶器と言われるものの存在が挙げられる。これは珠洲焼の影響を受けた、主に日本海側の窯で焼かれたと見られており、平泉へのルート上に挙げられるような場所に立地している遺跡などからも出土が見られる。また、平泉内からも一定量の出土が見られる（註12）ことから、注目すべき遺物と言え、そういったことを考慮しながら、積み上げ港と考えられる遺跡や河川交通・陸路に関連した遺跡の分析・検討を行っていく必要がある。また、今回触れることが出来なかったが、『吾妻鏡』にみる、“外ヶ浜”の存在も、大きくは、高麗王朝と奥州藤原氏との直接的な交易の可能性を考慮しながら、見ていく必要がある。

次に、太平洋側のルートに関しては、石巻湾周辺の湊や港湾施設が推定されるとともに、太平洋側のルート上に位置する、寄港地等を解明していくことがまず必要である。また、湊に関しては、近年の水中考古学の研究成果にも注目したい。沈没船の資料は、集散地遺跡に比べ、資料の性格が明確であり、当時の流通形態を直接的に示す資料であり、遺物の一括性が高い（野上2001）。よって、平泉に併行する時期の沈没船の存在が確認されれば、流通経路の問題にとどまらず、当時の流通形態の解明にもつながってくる。

陸路のルートについては、考古学的な調査が進んできてはいるものの、まだ始まったばかりである。文献史学による諸研究を学ぶとともに、調査事例の増加を待ちたい。

謝辞

本稿を成すにあたり、多くの方々、機関にご教示、ご協力を頂いた。記して感謝したい。

飯村均、岡田裕之、片山まび、金子佐知子、工藤清泰、斎藤邦雄、榊原滋高、佐々木浩一、鈴木和子、高桑弘美、高橋学、高橋興右衛門、羽柴直人、水戸部秀樹、八重樫忠郎、山口博之、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、浪岡町中世の館、平泉町文化財センター、八戸市博物館、(50音順、敬称略)

註

- 1 韓半島産陶磁器の名称については、高麗時代に作られた陶磁器は、青磁を中心として生産されているものの、白磁や陶器類なども生産されていること、また、近年、韓国国内で高麗時代の製品を真似て生産している青磁類についても、高麗青磁の名称を用いており、それとの混同を避けるため、この語を用いる。
- 2 編年・時期区分については、森本朝子氏・片山まび氏両氏の分類（森本・片山2000）、西谷正氏の時期区分（西谷1983）、そして森田勉氏の編年試案（森田1985）を考慮にしながら、消費地日本における時期区分の作成をするとともに、瓶の編年について試みた。なお、各氏の時期区分の相関関係については、第1図にまとめた。また、韓国国内においての鉄絵青磁の研究としては長谷部楽爾氏、崔健氏の研究（長谷部1987、崔1996）などが挙げられる。

- 3 第2図参照。また、() 内の数字については、第2図に対応している。出典は、文末の参考文献に挙げた。
- 4 日本から出土する韓半島産陶磁器については、基準資料となりうる紀年銘資料などがほとんどなく、年代的な根拠は、韓半島産陶磁器と共伴する中国陶磁器や国産陶器、そして、在地土器の年代観によるところが大きい。
- 5 崔健氏論文(1994「韓国初期青磁の分類と変遷—窯址出土資料を中心に—」『東洋陶磁』第22号 東洋陶磁学会) 参照。
- 6 鄭良謨氏によれば、実際に生産地においても、中国・越州窯青磁と、韓国において最初期といわれる青磁との区分が難しい部分があるという。よって、日本でも従来、越州窯青磁と言われているものの中に、最初期とされる製品が混入されている可能性も大いにあり得る。今後、中国産陶磁器に関しても再検討を加えていく必要がある。また、今後、先蛇ノ目高台などの製品の出土が多く確認されれば、時期区分の細分を行なっていく必要がある。
- 7 羽柴直人氏のご教示による。
- 8 生産地においては、瓶子(梅瓶)のほかにも、碗や鉢をはじめとして、広口瓶、油壺、水注、瓜形瓶、筒形瓶、天目台、長鼓など器種は豊富である。
- 9 東北地方における韓半島産陶磁器の出土状況については、従来言われてきた通り、14世紀後半以降(IV期)と考えられる製品の出土が多くみられた。器種についても山形県寒河江市・高松Ⅱ遺跡から出土が見られた袋物(瓶子の可能性が高い)の製品を除いて、全て碗・皿の類いであった。分布状況については、第6図を参照。
- 10 山口博之氏のご教示によると、近世において、奥羽山脈の峠を越える街道がいくつか確立していたとすることである。また、秀衡道などの伝承もあることから、中世においても峠を越えるルートが推測できる。
- 11 中世の道路遺構に関する研究は、中世みちの研究会(1998年発足)において、精力的に研究が行なわれてきている。
- 12 註6と同じ。

なお、柳之御所遺跡、平安京左京八条三坊七町、博多遺跡群の遺物実測図については、降矢が実測、作図を行った。

参考文献

論文等(50音順)

- 大石直正 2001『奥州藤原氏の時代』吉川弘文館
- 小野正敏 1997『戦国城下町の考古学』講談社
- 金森安孝 1999「仙台城本丸の発掘と出土陶磁」『貿易陶磁研究』No.19日本貿易陶磁研究会
- 新城常三 1967『鎌倉時代の交通』吉川弘文館
- 竹田 覚 1989「別府若宮の礎石に関連する遺物について」『風早』第21号 風早歴史文化研究会
- 高橋富雄 1997「平泉文化の道—陸の道海の道—」『岩手史学研究』第80号 岩手史学会
- 崔 健 1996「靑磁の特徵と展開」湖林出版社
- 西谷 正 1983「九州・沖縄出土の朝鮮産陶磁器に関する予察」『九州文化研究所紀要』第28号 九州大学九州文化史研究施設
- 1994「日本出土の朝鮮陶磁—高麗青磁を中心として—」『東洋陶磁』第22号 東洋陶磁学会
- 野上建紀 2001「陶磁器研究と水中考古学」『月刊 考古学ジャーナル』No.480 ニュー・サイエンス社
- 野守 健 1944『高麗陶磁の研究』清閑舎
- 長谷部楽爾 1978「鉄絵青磁・鉄彩手・鉄釉」『世界陶磁全集』18・高麗 小学館
- 降矢哲男 2000「遺跡出土の高麗青磁」『南島考古』第19号 沖縄考古学会

- 松本建速 1992「柳の御所跡におけるかわらけの存在の意味」『紀要XⅡ』(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
 1995「平泉のかわらけと平安京のかわらけの比較」『紀要XⅤ』(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
 1995「ロクロかわらけと手づくねかわらけ」『岩手考古学』第6号 岩手考古学会
- 峰岸純夫 1995「中世東国水運史研究の現状と問題点」『中世東国の物流と都市』山川出版社
- 宮崎貴夫 1998「長崎県地域の貿易陶磁の様相—肥前西部・壱岐・対馬—」『貿易陶磁研究No.18』日本貿易陶磁研究会
- 宮瀧交二 1999「北武蔵地域における中世道路研究の現状と課題」『中世の道と物流』山川出版社
- 森 達也 1992「東京・日野市南広間地遺跡と出土陶磁器」『貿易陶磁研究No.12』日本貿易陶磁研究会
- 森田 勉 1985「北部九州出土の高麗陶磁器—編年試案—」『貿易陶磁研究』No.5日本貿易陶磁研究会
- 森本朝子・片山まび 2000「博多出土の高麗・朝鮮当時の分類試案—生産地編年を視座として—」『博多研究会誌』第8号 博多研究会
- 八重樫忠郎 1999「平泉への道・平泉の道」『中世の道と物流』山川出版社
 2000「東日本における中世後期の貿易陶磁様相」『貿易陶磁研究』No.20日本貿易陶磁学会
 2001「東北における中世初期陶磁器の分布」『都市・平泉—成立とその構成—』日本考古学協会2001年度盛岡大会実行委員会
- 矢田俊文 1999「中世水運と物流システム」『日本史研究』No.448日本史研究会
- 山本信夫 1985「日本における初期高麗青磁について—太宰府出土品を中心として—」『貿易陶磁研究』No.5日本貿易陶磁研究会
 2001「11・12世紀平泉の貿易陶磁と京都・大宰府」『都市・平泉—成立とその構成—』日本考古学協会2001年度盛岡大会実行委員会
- 尹 龍二・片山まび訳 1998『韓国陶瓷史の研究』淡交社
- 吉岡康暢1994『中世須恵器の研究』吉川弘文館
- 1990『遺跡出土の朝鮮王朝陶磁』茶道資料館
- 1990『浪岡城—中世城館の復元—』浪岡町中世の館
- 1995『集成 鎌倉の発掘』第5巻 新人物往来社
- 1997『貿易研究集会平泉大会資料集 東北の貿易陶磁』日本貿易陶磁研究会
- 2000『岩手の経塚』岩手県立博物館

報告書(発行年順)

- 1979『上浜田遺跡 本文篇』神奈川県教育委員会
- 1982『多摩ニュータウン遺跡—昭和56年度—』東京都埋蔵文化財センター
- 1982『平安京左京八条三坊』財団法人京都市埋蔵文化財研究所
- 1986『高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅴ 博多—高速鉄道関係調査(2)—』福岡市教育委員会
- 1987『境関館遺跡』青森県教育委員会
- 1988『宇津木台遺跡群XⅡ 1984年度発掘調査報告書(2)』八王子市宇津木台地区遺跡調査会
- 1991『博多17』福岡市教育委員会
- 1992『博多26—博多遺跡群第46次調査報告書—』福岡市教育委員会
- 1993『根城—本丸の発掘調査—』八戸市教育委員会
- 1994『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書10』鎌倉市教育委員会
- 1998『荒井猫田遺跡(Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ区)』郡山市教育委員会ほか
- 1998『平成8年度京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所
- 1999『高松Ⅱ・Ⅲ遺跡発掘調査報告書』財団法人山形県埋蔵文化財センター
- 1999『若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書』若宮大路周辺遺跡群発掘調査団
- 2000『洲崎遺跡』秋田県教育委員会
- 2000『十三湊遺跡—第86次発掘調査報告—』市浦村教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室
- 2000『湯築城跡』財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 2001『観音寺廃寺跡』秋田県教育委員会
- 2001『館堀城跡』秋田県教育委員会

白河・

はじめに

文治5

る。奥州

を滅ぼした

摘されてき

と言える。

ぐ位置にあ

を与えてく

な位置を占

の都市から

古代から

を強く意識

しかし、こ

州藤原氏の

これからの

あろう。

さて、者

理解として

確かに11世

そのことと

むしろ、白

河・鳥羽の

とを目指し

他方、奥

一般的に見

景には、一

無量光院に

寝殿造風で

割に近い形

しかし、

作過程など

と、その外

二つ目の鴨

開しそうな

市計画につ

安京などの

以上述べ

はじめに

文治5年(1189)、源頼朝軍によって滅ぼされた奥州藤原氏が約100年間、その拠点としたのが平泉である。奥州藤原氏については早くから黄金に彩られた文化的側面に注目が集まっていた。また、奥州藤原氏を滅ぼした鎌倉幕府の先駆的な位置付けがなされる一方で、俘囚である安倍・清原氏を受け継ぐ側面も指摘されてきた。奥州藤原氏はこのように日本史の中で古代から中世への画期に位置する極めて重要な存在と言える。同様のことが都市平泉についても言うことができる。平泉は古代の平安京と中世の鎌倉をつなぐ位置にあるのである。そして、古代・中世にとどまらず日本都市史全体について考える際に多くの示唆を与えてくれるとともに、東アジア世界の都市の中での日本の都市の特質を明らかにしていく上でも重要な位置を占めていると考えられる(吉田2001、以下前稿と呼ぶ)。すなわち、中国の都城制を導入した古代の都市から日本の独自性が表面に現れるようになる中世以降の都市への結節点に平泉があるのである。

古代から中世への過渡期に誕生した平泉について、従来の研究は京都風の大寺院に注目するあまり京都を強く意識していたとされたり、一方では俘囚安倍・清原氏の伝統の上での位置付けが議論されてきた。しかし、この約10年にわたる柳之御所遺跡の発掘調査の成果によって、これまでベールに包まれていた奥州藤原氏の実像がかなり見えてくるようになってきている。こうした具体的な遺物・遺構を抜きにしてはこれからの平泉研究は成り立たない段階に入っている。このような目で平泉研究も進められていく必要があるだろう。

さて、都市としての平泉のモデルとして、これまで京都郊外の白河・鳥羽が指摘されており、一般的な理解としても受け入れられてきた(齊藤1992、五味文彦2001)。しかし、このことは自明なのであろうか。確かに11世紀末から次々に展開していった白河・鳥羽は平安京の外に誕生した新しい都市ではあったが、そのこととほぼ同時期に作られた平泉とを簡単に同系統の都市ととらえることは短絡的ではなからうか。むしろ、白河・鳥羽そのものの内容・実質をまず明らかにした上で議論する必要があるだろう。本稿では、白河・鳥羽の内実について、その全てを明らかにすることは当然出来ないが、大きな見通しだけでも示すことを目指したい。

他方、奥州藤原氏のイメージとして京都を強く意識し、京都の文化の移入に心血を注いだとする見解が一般的に見られるが、この点についても再検討を行いたい。これまで平泉文化を京都風ととらえてきた背景には、一つ目に毛越寺や無量光院などの浄土庭園を伴う華麗な寺院が造営されたという点がある。特に無量光院は宇治平等院を忠実に模している。二つ目は平泉館・伽羅御所などの奥州藤原氏の居館が貴族の寝殿造風であったとイメージされてきたことである。三つ目に、平泉の町割が平安京を規範とした方格地割に近い形態であったと推測されている点がある。

しかし、以上の諸点についても詳細に検討する必要があるだろう。一つ目の寺院に関して、確かに仏像の制作過程など京都文化の移入に力を注いでいたことは明らかであるが、例えば、無量光院について見てみると、その外郭施設は築地ではなく土塁が採用されるなど、全てが京都風に作られていたわけではなかった。二つ目の寝殿造の居館についても、現在も進められている柳之御所遺跡の発掘調査の結果、寝殿造風に展開しそうな遺構も存在するが、明確に寝殿造風に復元できる段階にはない。三つ目の方格地割に基づく都市計画については前稿でも述べたように、方格地割そのものより軸線道路が重要な意味を持っており、平安京などの都城のように方格地割を全面的に展開する意図の下に平泉が形成されたのかは疑問である。

以上述べてきたことから、今後の課題としては次のようなことが上げられる。

平泉のモデルとされる白河・鳥羽について、平泉と比較する前提として白河・鳥羽そのものの検討が必要である。そもそも白河・鳥羽は都市なのか、また、どのような性格を持っていたのか、といった点を解明しなければならない。その上で平泉との比較をする必要がある。

奥州藤原氏が京都の文化を導入することに努力していたことは首肯されるが、ただ単純に模倣していたのか、あるいは模倣することができたのか、このことは奥州藤原氏の性格に関わる問題でもある。

本稿では、以上の課題について不十分ではあるが、簡単な検討を試みたい。

第一章 白河・鳥羽

第一節 白河

平安京の東側、鴨川を渡った白川の流れる辺りが白河と呼ばれる地域である（第1図）。この地に白河天皇が法勝寺を建立してから次々と御願寺が建設され、いわゆる六勝寺が誕生する。一方で白河北殿・南殿

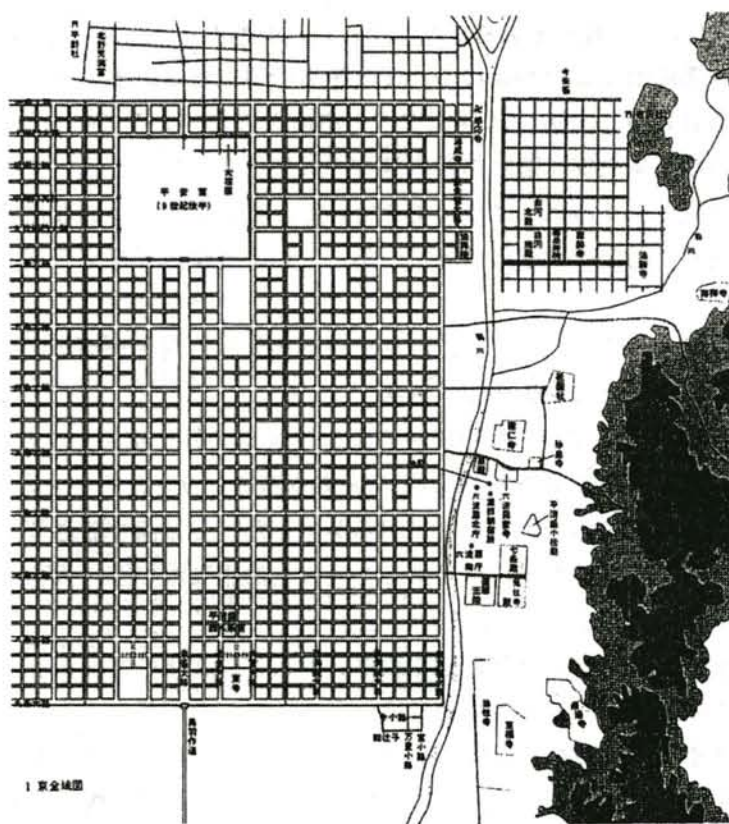


図1 平安京と白河(『図集日本都市史』より)

などの院御所も造営され、院政期の政治的・文化的拠点の一つとなったことは周知のことである。しかし、白河という地が、どのような性格の場であり、院政においてどのような役割を果たしていたのか、といった点を再確認していくことが必要である。

白河、法勝寺に関する研究は古くから行われており、例えば、法勝寺をはじめとする六勝寺の位置関係とそれらを含む白河の地全体に及ぶ方格地割を復元されたのが、福山敏男氏である(福山1968)。方格地割については、その後杉山信三氏による復元案も提示されているが(杉山1981)、いずれにしても平安京の条坊を延長した形での地割の存在が推測されている。

また、文献史学の側から、法勝寺の九重塔に注目して院の権力の専制性を読み取ろうとする見解も出されている。このように今までの研究では方格地割や政治史的な関心からの検討がなされてきたが、白河という地自体の性格を十分に明らかにし得たとは言えない。そこでまず白河という地そのものの性格をとらえ直すとともに、その上でこの地に法勝寺をはじめとする寺院群が建立された背景を考えてみたい。

1 白河の地

桓武天皇が平安京に遷都した延暦13年(794)以降、鴨川を挟んだ東側の白河・東山周辺はどのような性格の空間であったのか。その性格には二側面があった。

(1)『日本三代実録』貞観14年(872)2月7日丁未条

正三位守右大臣藤原朝臣氏宗薨云々、輟朝三日、贈正二位、遣参議在原朝臣行平等、齋勅書告身、就東山白河第宣制、依遺命孝子等不受、

(2)『扶桑略記』元慶3年(879)5月4日条

太上天皇遷自清和院御栗田院、即是右大臣藤原基経之山庄、在鴨水東也、太上天皇留心於空寂之門、到屢於清閑之境、出彼桂殿、入此松庭、

(3)『日本紀略』安和2年(969)3月13日条

大納言在衡卿於栗田山庄有尚齒會、七叟各脱朝衣、著直衣指貫、希代之勝事也、

(4)『日本紀略』安和2年(969)7月7日条

左大臣(藤原師尹)於白川家有七夕宴、

(5)『日本紀略』寛和2年(986)6月20日条

右大將(藤原)濟時自去十八日於白河修八講、今日当五卷、諸卿以下行向、施捧物、

(6)『百鍊抄』天承元年(1131)3月20日条

権大納言(藤原)宗忠卿於白河山庄行尚齒會、

白河の名は清らかな白川が流れていることに因むとされているが、貴族の別荘地として好まれていた。藤原氏宗、濟時、宗忠らの別荘があり(史料1、4、5、6)、隣接する栗田山にも藤原基経や大江在衡らの山庄があつて七夕宴や尚齒會が催されていた。このように鴨川を東に渡った地は別荘地として利用されたが、それは史料(2)に栗田院のあたりが「清閑之境」、すなわち清浄で静かな土地であつたことに起因しているよう。

(7)『日本文徳天皇実録』斉衡3年(856)6月丙申条

正三位源朝臣潔姫薨、(中略)、薨時、扱賀楽岡白川地而為葬地、

(8)『日本三代実録』貞観14年(872)9月4日

葬太政大臣(藤原良房)於愛宕郡白川辺云々、

(9)『扶桑略記』元慶4年(880)12月7日条

是夜酉四尅、奉葬太上天皇於山城国愛宕郡上栗田山、奉置御骸於水尾山上、

(10)『日本紀略』康保2年(965)4月27日条

今夕、葬故右大臣(藤原顕忠)於南白川東山辺、

(11)『日本紀略』安和2年(969)10月17日条

葬左大臣(藤原師尹)於東山観音寺西岡、

(12)『日本紀略』永祚元年(989)9月26日条

摂政(藤原兼家)於吉田被立千本率塔婆、有講演事、

別荘地が構えられた白河の別の側面として葬送の地という面があった。同じく鴨川の東で東山の南方に

は鳥辺野という葬送の地が存在し有名であるが、白河周辺も同様に葬送の場としての性格を持っていた。ただし鳥辺野に対して貴族など上層の者が主に葬られていた点に相違が見られる。源潔姫、藤原良房が白河に葬られ（史料7、8）、清和天皇は死を前にして藤原基経の山庄粟田院に入り崩御後に粟田山に葬られた（史料9）。藤原顕忠は南白川東山辺に（史料10）、藤原師尹は東山観音寺西岡（史料11）にそれぞれ葬られている。このように鳥辺野とは異なって貴顕の葬送の地として白河・東山周辺は利用されてもいたのである。また、藤原兼家によって白河の北吉田の地に千本卒塔婆が立てられた（史料12）。

以上のように、白河という地は別荘地でもあり、葬送の地でもあった。両者の性格は白川の流れと相まって清浄な土地であることに由来していたと考えられる。尚齒会の場合として使われたことにもその脱俗の雰囲気を読み取れる。こうした性格が、後に法勝寺をはじめとする寺院群が建立されていく背景となったと考えられる。

ところで貴族たちの別荘地は白河だけに集中していたわけではなかった。次に上げる史料のように平安京周辺にひろがっていたのである。

(13)『扶桑略記』元慶元年（877）4月9日庚辰条

（前略）元慶元年三月、於小野山庄置宴、（中略）、名為尚齒会、（後略）

(14)『扶桑略記』元慶4年（880）11月25日条

先是、太上天皇聖体不予、是日、遷自棲霞觀、御圓覺寺。詔授左大臣源朝臣融家令正六位上伴宿祢枝雄從五位下、棲霞觀者、左大臣山庄也、故有此賞也、圓覺寺者、右大臣粟田山賞也、

(15)『日本紀略』長和5年（1016）12月8日条

今日、摂政（藤原道長）乘輿向桂山庄、諸卿殿上人騎馬追参、

平安京に住む貴族たちにとって、白河だけが別荘地として選ばれたわけではなく、平安京の北方の棲霞觀（史料14）、西方の桂山庄（史料15）、後に触れる南方の鳥羽など、周囲の山や川などに設けられていたことが知られる。つまり、平安京周辺で白河のみが別荘地として優れていたわけではなく、それぞれの地に別荘が置かれていたのである。特に葛野川（桂川）は御遊の場として有名である。

それではこれら平安京周辺の別荘地の中で白河に法勝寺が建てられた背景は何であったのか。一つは、すでに述べたように清浄な土地と観念されていたことがある。一方、先行研究に指摘があるように平安京と東日本をつなぐ交通の要衝であった点がある。背景を一つだけに特定することはできないが、以下に述べるように摂関期以降、摂関家の白河殿が他の別荘地に比して目立って用いられるようになった点も注目される。

不完全な表ではあるが、簡単に白河殿に関する史料を集めた第1表を見ると、長元元年（1028）3月20日に藤原頼通が白河殿を伝領してから初めて入っている。その翌年4月28日と5月28日には競馬が催され、その後摂関家の別荘の中ではコンスタントに用いられていることが読み取れる。

それでは白河殿は摂関家、あるいは伝領した頼通にとってどのような意味を持っていたのであろうか。まず長元元年に伝領後初めて白河殿に入ったことが知られるが、前年の万寿4年（1027）12月に父道長が没している。伝領した時期そのものは特定できないが、道長の死後初めて入っていることから、白河殿が桂山庄や宇治別業などの他の別荘とは異なる位置づけをされていたことが推測される。また、長元3年（1030）10月2日、頼通の白河殿への移徙儀が行われており、このことから白河殿が新装されたことが窺われる。さらにその後もコンスタントに白河殿が用いられるようになる。以上の経緯から白河殿は摂関家の別荘の中では特別な位置を占めており、それを頼通は改装して詩会などの行事の場として積極的に用いたものと推測される。そこには頼通が平安京内の邸宅とは別に白河殿という別荘に自らの権力の一端を担わせようと

していた意図を読み取ることができる。

第1表 藤原頼通以降の白河

年 月 日	山荘名	行 事 な ど	出典
長元1・3・20	白河院	藤原頼通、伝領後初めて御覧	左
同 2・4・28	白河別業	競馬（藤原頼通）	百
同 2・5・28	白河別業	競馬（藤原頼通）	紀
同 3・10・2	白河第	移徙（藤原頼通）	紀
同 5・3・2	白河第	天皇御遊	紀・左
同 5・3・13	白河	弓負懸	左
同 5・3・17	白河殿	弓負懸	左
同 5・9・30	白河院	詩会（藤原頼通）	紀
同 6・2・16	白河院	子日之遊（藤原頼通）	紀
同 6・3・5	白河院	賦詩（藤原頼通）	紀
同 7・9・1	白河殿	藤原頼通滞在	左
同 9・3・8	白河院	賦詩・蹴鞠（藤原頼通）	紀
同 9・3・9	白河第	講詩	紀
寛徳2・閏5・15	白河院	上東門院が遷御	扶
永承6・9	白河院	競馬	扶
康平3・3・25	白河院	賦詩・行幸	百・扶
同 3・11・26	白河別業	大僧正明尊90賀（藤原頼通）	扶
承保2・6・13		白河天皇に献上（藤原師実）	百

凡例) 左=『左経記』、百=『百鍊抄』、紀=『日本紀略』、扶=『扶桑略記』

そこで注目されるのは、白河殿が藤原良房以来伝領されてきた別荘であった点である。

(16)『公卿補任』貞観13年(872)条

太政大臣従一位 藤良房 六十九 (中略)、九月四薨、在官廿五年、同四日贈正一位、号白河殿、又染殿、諡曰忠仁公、封美乃国、輟朝三ヶ日、是日葬山城国愛宕郡白河辺、摂政十五年、或十四年、

(17)『百鍊抄』承保2年(1075)6月13日条

被始白河院御願事、件所故宇治大相国(藤原頼通)累代別業也、左大臣(藤原師実)伝領献公家、

史料(16)のように良房は白河殿とも称され、この地に葬られている(史料8)。人臣で最初の摂政となった良房の別荘として白河殿は累代伝領されてきたのである。そこに他の別荘とは異なる特別な位置づけを見出すことができる。その白河殿を藤原師実は白河天皇に献上したのである(史料17)。そして、それは頼通の死の翌年であった。その政治的な意味については院政期政治史研究の問題となるため、深くは言及しないが、白河殿が献上されるまでにはいくつかの画期が見出せる。つまり、初めて摂政となった良房によって白河殿が設けられ、自身も白河に葬られ、これによって摂関家の別荘の中で特別な地位を持つこととなり、その後道長から頼通へ伝領され頼通の手で整備され用いられるようになったのである。

さて、師実から白河殿を献上された白河天皇は、そこに法勝寺を建立した。その後院御所が造営され、その他にも徐々に御願寺や院御所が建設されていったが、その後の白河の都市的な様相を見てみたい。

(18)『本朝世紀』康治元年(1142)6月18日条

権大納言藤伊通卿参左仗、被行宮城使防鴨河使除目、右大弁源俊雅朝臣書之、抑防河事、近年絶無修復、貴賤之輩悉占居宅於鴨水之東、各築堤防於東岸、如此之間、京洛殆為魚鼈之害歟、

(19)『本朝世紀』久安4年(1148)3月29日条

頭中将經宗記云、(中略)、今日、從姉小路南自白河之東辺焼亡、而間、依北風甚、至于祇園天神当焼失、

(20)『本朝世紀』久安5年(1149)6月19日条

白河有焼亡、白川殿御所預東市正經則宅云々、

(21)『本朝世紀』仁平元年(1151)2月21日条

今夕、雷火烧木工権頭季兼朝臣白川堂、

(22)『百鍊抄』建久3年(1192)10月10日条

白河東光寺辺火事、余焰付法勝寺御大堂、即打消了、

(23)『百鍊抄』寛喜3年(1231)8月1日条

丑刻、法勝寺西方在家火事、余炎及尊勝寺五重塔、払地焼失、

12世紀中頃には白河東辺から祇園周辺まで火事で焼亡するくらい人家などが建ち並んでいたことが知られる(史料19)、院御所の近くには御所預の邸宅も建っていた(史料20)。また六勝寺以外にも木工権頭の私堂や東光寺といった寺院も造られており(史料21、22)、法勝寺の西方にも在家が並んでいたことが知られる(史料23)。康治元年(1142)に鴨川の氾濫に関して貴賤の輩が居宅を鴨川の東にばかり設け鴨川の東岸に勝手に堤防を築いているため、氾濫した水が西側の平安京に流れ込んでいると指摘されている(史料18)。このように鴨川の東側に人口が集まりはじめ、白河周辺も寺院や院御所だけでなく人家が建ち並ぶようになっていったことが窺われる。このように法勝寺建立後、別荘地、あるいは葬送の地であった白河は人家が増えていき都市的な様相を呈するようになったのである。鳥羽も白河も院御所は存在していても上皇が常住するわけではなく政務決裁も平安京内の院御所で行われていたという事実が明らかにされているが(井上1981)、権力核が不在であったとしても都市の様相は確実に形成されていったと考えられる。しかし、都市としての計画の存否については疑問が残る。すなわち、次節で述べる鳥羽が一斉に家地を班給したのに対して、白河は徐々に御願寺や院御所が造営されており、条坊制を延長した地割が復元されてはいるが、総体的な都市計画が存在したとは考えにくい。

第二節 鳥羽

院政期の鳥羽については近年議論がさかんになされている。京都と西日本を結ぶ流通の要衝であることを大きく評価される大村拓生氏(大村2000)や芸能に政治的意味を見出される美川圭氏(美川2001)らの論考が相次いで発表されている。本稿ではこれらの論考に導かれながら白河との対比を行いたい。

(24)『扶桑略記』応徳3年(1086)10月20日条

公家近来九条以南鳥羽山莊新建後院、凡卜百余町焉、近習卿相侍臣地下雑人等、各賜家地、营造舍屋、宛如都遷、

鳥羽殿はもともと受領藤原季綱の山庄であったが、それを季綱が白河天皇に献上し、譲位後の後院として造営したものであった。そして、重要な点は後院だけではなく臣下たちにも家地を班給したことである。家地を分け与えたということは、当然鳥羽一体に計画的な地割が施されたことを推測させる。この点から

鳥羽の場合

また、白河に
れた後に付
述べたよう
れる。

さて、以

白河とい
浄な地とし
相伝の白河
利なように
たわけであ
総体的な計

鳥羽も別
ると院御所
て院御所先

また、鳥羽
はじめから

白河と鳥羽
白河は御願
先行型で、鳥

このように
の性格も異
両者を簡単
河・鳥羽と平
する必要があ

第二章 平泉

平泉を都市
討したが、本
平泉館が奥
従来漠然と京
の発掘の結果
である。当然
現時点での発

まず平成13
見てみたい。
主殿を中心と
というよりは

鳥羽の場合は具体的にどの程度かはわからないが、総体的な計画が存在していたと考えられる。

また、白河の場合は法勝寺がはじめに建立されて院御所が造営されたが、鳥羽の場合は院御所が造営された後に付属する御願寺が建立されていった点でも両者には大きな違いが見られる。その背景には前節で述べたように白河はもともと葬送の地であり、鳥羽とは異なった性格を持っていたことがあったと考えられる。

さて、以上述べてきたことをまとめると、次のようになる。

白河という地は、元来貴族たちの別荘が営まれると同時に葬送の地でもあった。このように白河には清浄な地としての性格が持たされていたのである。このような白河の性格を背景として藤原師実から摂関家相伝の白河殿が白河天皇に献上されると法勝寺が建立されることとなった。その後、法勝寺に通うのに便利のように院御所が造営されたのである。つまり、白河では御願寺が先に建てられた後に院御所が造られたわけである。いわば御願寺先行型と言える。また、白河全体の都市計画については法勝寺建立当初から総体的な計画があったとは考えにくい。

鳥羽も別荘が営まれるとともに河川交通など流通の要衝であったが、受領の山庄が白河天皇に献上されると院御所が造営され、その後付属する御願寺が建立されていった。このことから鳥羽は白河とは異なっ

て院御所先行型と言える。

また、鳥羽では院御所だけでなく臣下たちの家地も一斉に班給されており、この点から総体的な計画ははじめから存在していた可能性が考えられる。つまり、白河とは違って計画性の存在が推測される。

白河と鳥羽とを比較すると、同じく院政の舞台となったとはいえ、対照的な位置にあったことがわかる。白河は御願寺先行型で、当初から一貫した都市計画があったとは考えにくい。これに対して鳥羽は院御所先行型で、鳥羽殿造営の段階で計画性が存在したと考えられる。

このように白河・鳥羽を院政の舞台として一括りに論ずることはできないことがわかった。両者は本来の性格も異なり、白河天皇に献上された後の展開のあり方についても違いがあったのである。とするなら、両者を簡単に平泉のモデルと見ることは難しいことになる。本稿ではまだ検討が不十分ではあるが、白河・鳥羽と平泉を単純に比較することができないことがわかった。今後はより具体的に論点を絞って比較する必要がある、一方で平泉独自の性格や特徴も存在するはずである。それら双方に目を配る必要がある。

第二章 平泉

平泉を都市ととらえた場合、東アジアの都市史の中でどのように位置付けられるかについては前稿で検討したが、本稿では都市全体ではなく、近年進展が著しい発掘調査の成果をもとに考えてみたい。

平泉館が奥州藤原氏の政庁であり、現在発掘されている柳之御所遺跡であると考えられている。そして、従来漠然と京都風の寝殿造の居館が建てられていたと推測されてきた。しかし、これまでの柳之御所遺跡の発掘の結果、寝殿造風に復元できそうな遺構も存在するが、明確に寝殿造の居館を復元することは困難である。当然現在までに調査された範囲外に中心施設があり、それが寝殿造風である可能性は残っており、現時点での発掘調査の成果に基づいて検討を試みたい。

まず平成13年(2001)10月27日に行われた柳之御所遺跡現地説明会資料に掲載された遺構図(第2図)を見てみたい。ここに検出された遺構は寝殿と対から成る寝殿造のような構成とは異なり、四面に廂の付く主殿を中心とする形式である。調査成果の詳細については正報告の刊行を待ちたいが、現段階では寝殿造というよりは大規模な主殿を中心とする建物構成であったと言える。

第2図 柳之御所遺跡 (現説資料より)



京都の
跡につ
第一節
大内
平安後
第1期
柱建物で
第2期
が配され
の掘立柱
もしくは
大内城
その居館
御所遺跡



京都の貴族風の居館ではないとすると、地方に目を転じたい。例えば管見に入った大内城跡と上浜田遺跡について紹介する。

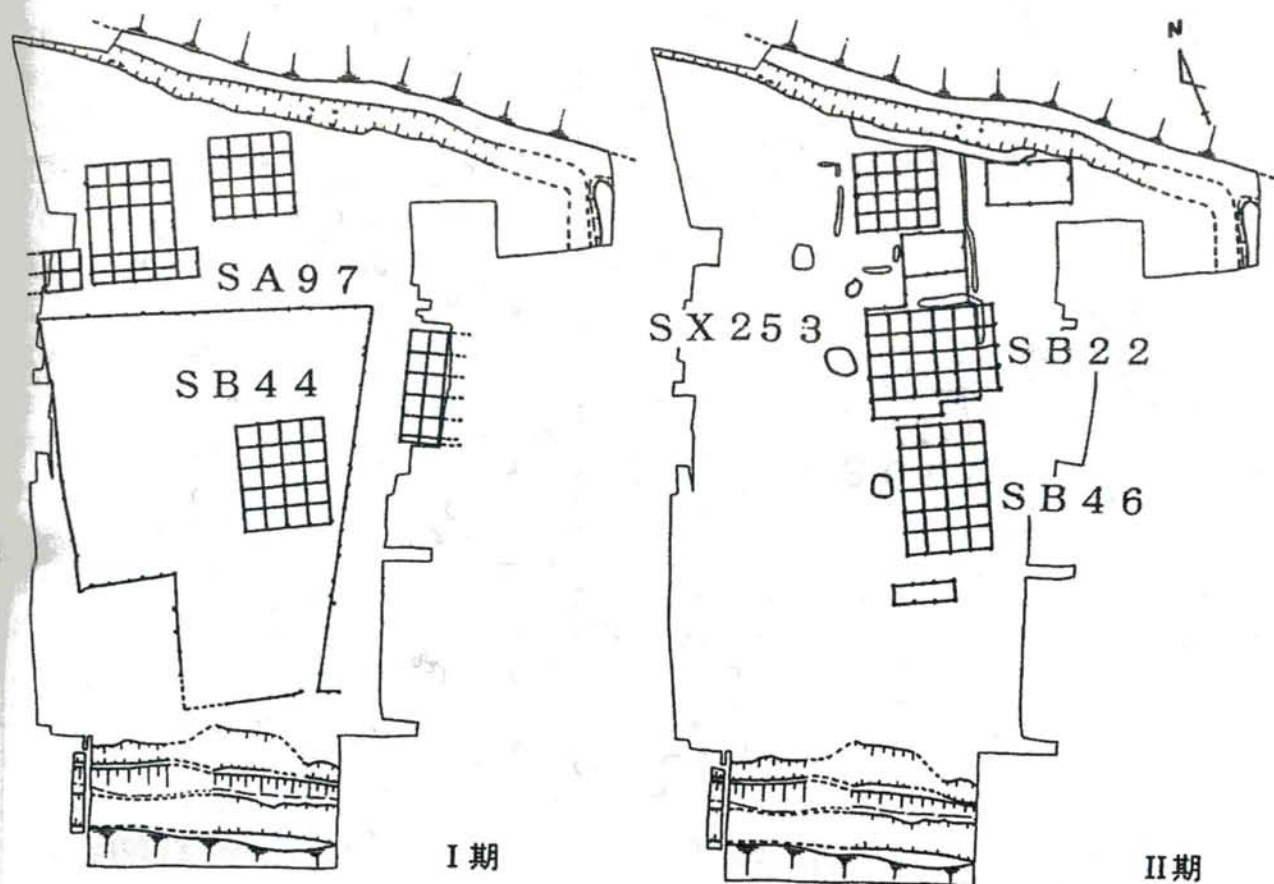
第一節 大内城跡（第3図）

大内城跡は京都府福知山市東南部に所在する中世の城館遺跡である。遺構の変遷は全部で4期に分けられ、平安後期から鎌倉時代にかけては第1期＝12世紀後葉、第2期＝12世紀末～13世紀初頭に相当する。

第1期には中心建物S B44があり、これを柵列S A97が囲んでいる。S B44は東西4間・南北5間の掘立柱建物である。外側には土塁や空堀が巡らされている。

第2期には、第1期の建物を取り壊して建て替えられている。中心建物としてS B22があり、南にS B46が配される。S B22は東西6間・南北4間、南に1間の廂を持つ掘立柱建物で、S B46は東西4間・南北6間の掘立柱建物である。これら主要建物の西方は空閑地となり、S B22の西に池のようなS X253があり庭園、もしくは広場として利用されたと推測される。

大内城は六人部荘を管理する荘官の館跡と推測され、平泉と同様12世紀末の居館跡として注目される。その居館の構造は堀と土塁に囲まれた中に主殿を中心に建物群が配置されたものであった。この点で柳之御所遺跡の現段階の発掘成果との類似性を見出すことができる。



第3図大内城跡

第二節 上浜田遺跡（第4図）

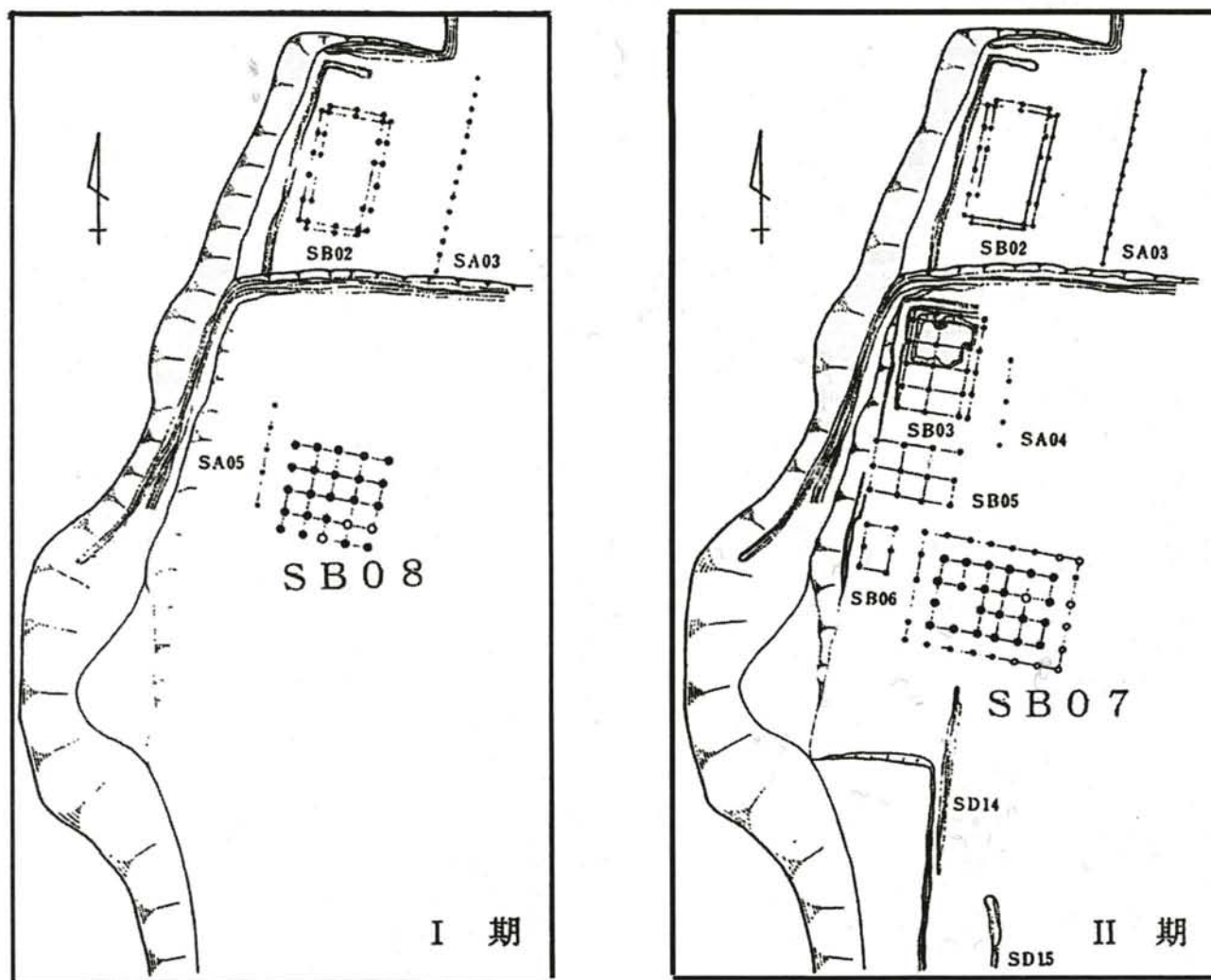
上浜田遺跡は神奈川県海老名市の座間丘陵南端に位置し、周辺には相模国分寺跡がある。平安末期には遺跡周辺は渋谷荘を領有した渋谷重国の支配下であり、相模平野の河原口には海老名氏が居館を構えていた。

遺跡Ⅰ地区の中世に関わる遺構は3期に分けられ、鎌倉時代についてはⅠ期－13世紀中葉、Ⅱ期－13世紀後半～14世紀代が相当する。

Ⅰ期はSB08を中心とし、西側に柵列SA05がある。SB08は東西4間・南北4間の掘立柱建物である。

Ⅱ期には大きく建て替えが行われ、SB07を中心として雑舎を配置している。SB07は、東西5間・南北3間の身舎に四面廂が付く掘立柱建物である。

上浜田遺跡は13世紀、鎌倉時代に入ってから居館遺跡ではあるが、主殿を中心とする構成であった点は同様である。



第4図上浜田遺跡

以上の2遺跡は平安末から鎌倉時代にかけての地方の在地領主、武士の居館とされるものである。これ以外にも発掘調査によって明らかにされている例もあろう。これら地方武士の居館と比較した場合、柳之御所遺跡の遺構との類似性が窺える。すなわち、柳之御所遺跡は貴族的というよりは武士的であったということが言える。

さらに、柳之御所遺跡について詳細に検討すると、以下のことに注目される。第2図の55S B 6建物跡は、現地説明会資料によると12世紀末の奥州藤原氏最末期にあたる遺構とされる。建物の特徴としては、4間・4間の身舎に四面廂が付く総柱建物である。この形式は先述の大内城跡・上浜田遺跡の主殿と同様の形式と言える。それに対して55S B 6掘立柱建物の下層から検出された55S B 5建物跡は梁間2間・桁行5間の身舎に東西2面に廂が付き、北側に4間・2間の付属部分が付く形式の建物に復元される。55S B 6建物以外は現在のところ、この形式のものばかりが検出されている。つまり、武士的な主殿は55S B 6建物の段階で登場したと評価できる。とするなら55S B 6建物の登場に奥州藤原氏の性格が大きく変化したことを見出すことができる。そして、その背景には奥州藤原氏を中心とした儀礼空間の変化があったと考えられる。古代国家的、あるいは王朝国家的儀礼から新しい儀礼に変わることによってその儀礼空間も変化したと推測される。これを仮に武士的儀礼とここでは呼ぶが、武士的儀礼とその空間構造についてはあらためて検討したい。いずれにせよ、柳之御所遺跡内で建物の構造が大きく変化することは重要で、そこに奥州藤原氏の性格の変化を見出せるだけでなく、古代から中世にかけての儀礼空間、儀礼原理の画期をも解明する鍵が隠されているのである。

第三節 家作制限令

平安時代の貴族の住宅として寝殿造はよく知られているが、身分によって居宅のランクに差がつけられていた。

(25)『日本紀略』長元3年(1030)4月23日条

仗議、諸国吏居処不可過四分一宅、近来多造営一町家、不濟公事、又六位以下築垣、并檜皮葺宅可停止者、

長元3年(1030)、陣定によって国司らの居宅を1町の4分の1に制限し、六位以下の者の居宅については築垣・檜皮葺が禁止された(史料25)。この制限令そのものは、京内の居宅を対象とする命令と理解すべきではあるが、身分によって家作に制限が加えられていたことがわかる。もし、この規定が地方にも準用されたとすれば、藤原清衡は六位であったことが知られるので、築垣・檜皮葺の使用は制限されていた可能性がある。

おわりに

奥州藤原氏の拠点、平泉については黄金文化のイメージが強く印象づけられ、京都風の貴族文化が持ち込まれていたと考えられてきた。しかし、全ての面において京都風であったと考える必要はない。発掘調査によって、その実像が少しずつ明らかにされつつあり、今後はそれらの成果の上に議論を深めていくことが求められる。本稿では、これまで想定されていた白河・鳥羽を平泉のモデルとする点と京都の寝殿造風の居館の存否について若干の考察を行った。まだ、進めなければならない作業は多く、本稿はあくまで中間報告にとどまっている。さらに詳細な検討は機会をあらためて行いたい。最後に今後の課題を含めて本稿のまとめをしたい。

①白河・鳥羽を平泉のモデルと考える前提として、白河・鳥羽それぞれに関して、より詳細な検討が必要である。その上で平泉との比較を行うことが望ましいと考えられる。

②平泉の性格は、奥州藤原氏の性格に規定されるものと考えられる。京都の文化の導入に努力したとはいえ、奥州藤原氏の本質は何であるのかが明らかにされなければならない。柳之御所遺跡の遺構からする

と、貴族的というよりは武士的様相の方が強いと考えられる。そして、重要なことは空間の構成原理の変質が見出されることである。また同時に奥州藤原氏の地位によっても法的規制を受けていた可能性が推測される。

③従来は白河・鳥羽だけが比較対象として注目されてきたが、鎌倉も含めて地方の武士の居館との比較も視野に入れる必要がある。各地の居館の発掘調査の成果を収集し整理することが重要である。

以上の3点が本稿の検討を踏まえた今後の課題である。これらの視点から平泉の実像に迫ることを目指したい。

〈参考文献〉

- 福山敏男 1968「六勝寺の位置」(福山敏男『日本建築史研究』墨水書房)
神奈川県教育委員会 1979『神奈川県埋蔵文化財調査報告15 上浜田遺跡』
井上満郎 1981「院御所について」(『御家人制の研究』吉川弘文館)
杉山信三 1981『院家建築の研究』吉川弘文館
京都府埋蔵文化財調査研究センター 1984『京都府遺跡調査報告書第3冊』
井上満郎 1989「院政期における新都市の開発」(『中世日本の諸相』上、吉川弘文館)
斉藤利男 1992『平泉 よみがえる中世都市』岩波新書
高橋康夫・吉田伸之・宮本雅明・伊藤毅 1993『図集 日本都市史』東京大学出版会
長宗繁一・鈴木久男1994「鳥羽殿」(『平安京提要』角川書店)
大村拓生 2000「鳥羽殿と交通」(『日本史研究』460)
岩手県教育委員会 2001「平成13年10月27日柳之御所遺跡現地説明会資料」
五味文彦 2001「中世都市の展開」(佐藤信・吉田伸之編『新体系日本史6都市社会史』山川出版社)
美川圭 2001「鳥羽殿の成立」(上横手雅敬編『中世公武権力の構造と展開』吉川弘文館)

東北地方の経塚 一分布傾向からの考察一

八重樫 忠 郎

はじめに

日本考古学協会2001年度盛岡大会において、北海道・東北地方の古代末・中世初期陶磁器集成⁽¹⁾が行われた。筆者もその作業に加わったが、あまりの膨大さに眩暈がしたものである。落ちている資料も若干あるが、皆の努力で膨大な資料集は完成した。

この資料集から12世紀の経塚・経塚状遺構を抽出し、作成した分布図をもとに本稿は考察する。その分布傾向から、東北地方の多くの歴史が読み取れるからである。

1. 集成

陶磁器単体で見つかることがほとんどで、その遺構が経塚なのか墳墓であったのか、明確にできない場合が少なくない。これを解消するために経塚と墳墓の相違点を検証しようという動きもみられる⁽²⁾。しかし工事中に発見されたなどの偶然による場合、石室の有無などの情報がないため、やはり判別できない。そのため今回は、墳墓もしくはその可能性もあるものも含めて集成してみる。

12～13世紀初頭に限定すると青森県9遺跡、岩手県31遺跡、宮城県16遺跡、福島県12遺跡、山形県36遺跡、秋田県12遺跡、計116遺跡が集成された。山形県と岩手県が群を抜いて多いことが判る。経塚もしくはその可能性の高いものを塗りつぶしたマークに、墳墓もしくは墳墓と伝承されるものを白抜きマークにする。■は常滑と古瀬戸、●は渥美、▲は須恵器系陶器、★は白磁四耳壺や経筒、石櫃などが出土した経塚である。常滑と渥美を分離したのは、両者の持つ意味がそれぞれ異なると考えているからである⁽³⁾。同一遺跡に複数の経塚が設けられている場合は、できるだけマークを併記している。

内容的には青森県では墳墓もしくはその可能性が高いものが4遺跡と、半数近くを占める。逆に岩手県ではそれらは2遺跡しかない。宮城県では3遺跡、福島県では1遺跡、山形県では10遺跡、秋田県では確認されていない。墳墓は山形県に多い。12世紀にはすでに霊場として、山形県は認識されていたのである。

2. 考察

(1) 分布

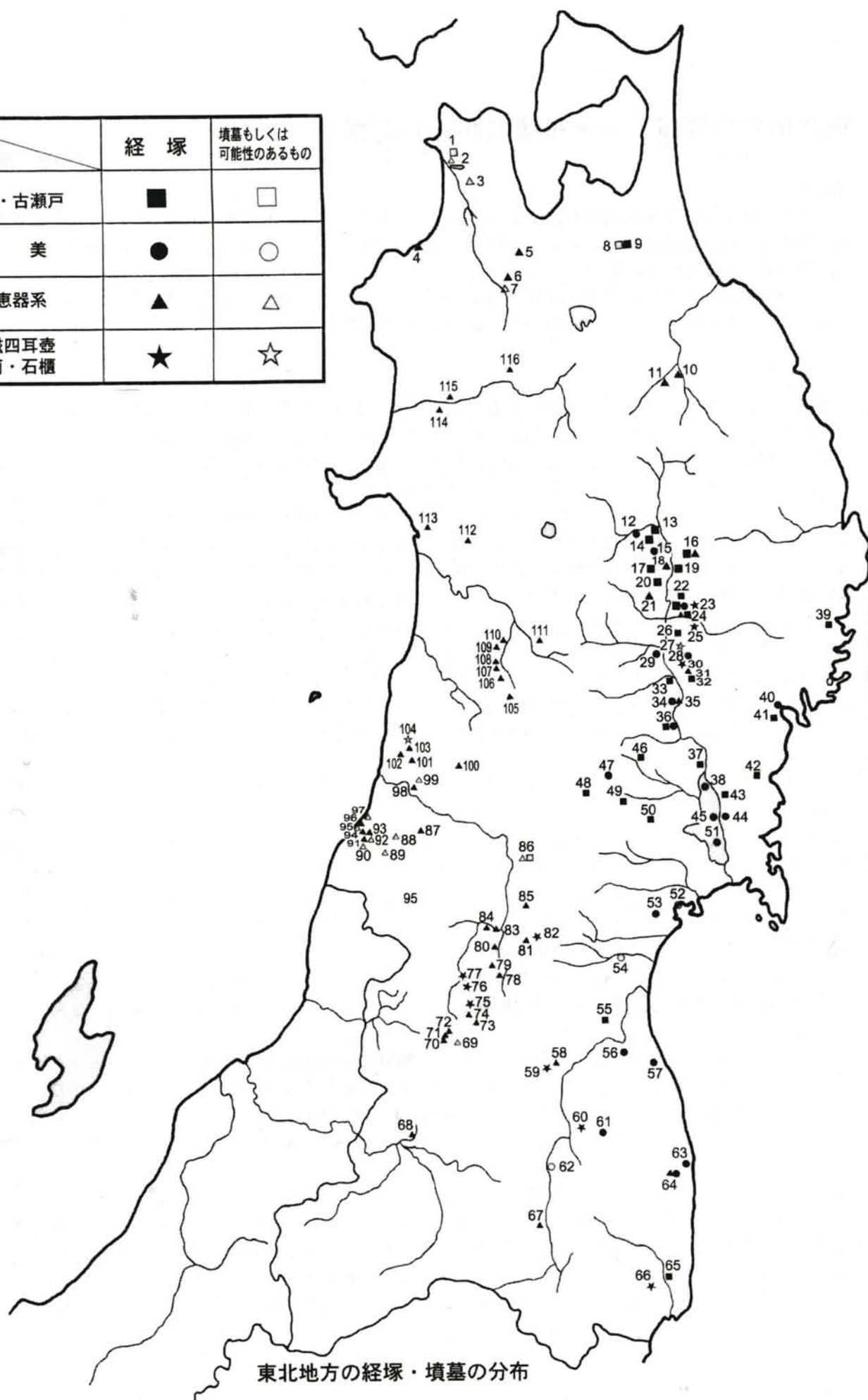
経塚の分布を見ると、北上川流域、山形県南部の寒河江・山形市近隣、秋田県南部に集中する傾向が認められる。北上川流域は平泉藤原氏の本拠地である。北上川流域の見晴らしの良い地区からは、今後も経塚が発見される可能性も示されている⁽⁴⁾。しかし近隣には、際立った12世紀の遺跡はほとんどない。この付近に設けられた経塚は、寺院や居館などに伴うものではないことが判る。

そもそも経塚は、末法の世から経典を護るタイムカプセルであった。納経の際には、読経などの儀式も行われたに違いない。納経することの功德はもちろんのこと、経塚自体が鎮護する宗教性を持っていたことも充分に考えられる。北上川流域の経塚は、往時の交通の大動脈を護るための結界的なものだった可能性が高いのである。

しかし設けられた場所が丘陵の端部であっても、簡単には見えなかったはずである。まして川舟に乗った人々は、ほとんど認識していなかっただろう。つまり往来する人々には、さして気にされていなかったというわけである。そうにもかかわらず設けた意味は、重要な交通路を維持管理するという支配者の論理ではないだろうか。北上川流域や海の道である三陸沿岸からも、経塚が発見される可能性があるという相原氏の指摘⁽⁵⁾は、まことにうなづけるものである。

山形県では最上川上流域や寒河江川近隣に多数の経塚が設けられている。この付近には12世紀の遺跡が多い⁽⁶⁾。経塚を営んだ人物の名は不明だが、有力者が存在していたことは疑いない。秋田県では雄物川上流域に経塚は多く分布している。また雄物川西岸にのみ分布していることも興味深い。宗教的な空間として位置付けられる12世紀の遺跡も存在する⁽⁷⁾。この付近には彼は奥州合戦の翌年、謀反を起こし滅ぼされた大河兼任という豪族がいた⁽⁸⁾。鎌倉相手に単身で謀反を企てるとは、並大抵の自信ではない。この付近の経塚は、大河一族が造営したものであろうか。

	経 塚	墳墓もしくは 可能性のあるもの
常滑・古瀬戸	■	□
渥 美	●	○
須恵器系	▲	△
白磁四耳壺 経筒・石櫃	★	☆



	遺 跡 名	出 土 遺 物	年 代	遺構種別	市町村名
1	伝山王坊跡	古瀬戸無釉四耳壺	12世紀末	墳墓	市浦村
2	相内出土	須恵器系刻文壺	13世紀初	墳墓?	市浦村
3	五輪神社跡	須恵器系壺	12世紀後半	墳墓?	中里町
4	赤石採集品	須恵器系経筒	12世紀後半	経塚	鯉ヶ沢町
5	源常平遺跡	須恵器系波状文四耳壺	12世紀後半	経塚	浪岡町
6	田舎館城付近	須恵器系波状文四耳壺	12世紀後半	経塚	田舎館村
7	杉館	須恵器系四耳壺	12世紀後半	経塚	平賀町
8	左組(1)遺跡	常滑複線三筋文壺	12世紀後半	墳墓	七戸町
9	左組(3)遺跡	常滑甕	12世紀後半	経塚	七戸町
10	西方寺毘沙門堂経塚	須恵器系波状文双耳壺	12世紀後半	経塚	一戸町
11	土踏まズの丘経塚	須恵器系波状文四耳壺	12世紀後半	経塚	浄法寺町
12	一本松経塚	渥美全面施釉壺	12世紀前半	経塚	盛岡市
13	内村地区	常滑大甕	12世紀後半	経塚?	盛岡市
14	油壺経塚	常滑二筋文壺	12世紀後半	経塚	盛岡市
15	城内山頂	渥美刻文壺	12世紀中葉	経塚	矢巾町
16	山屋館経塚	須恵器系波状文四耳壺 常滑櫛目三筋文壺	12世紀後半 12世紀中葉	経塚 経塚	紫波町 紫波町
17	新山神社境内	常滑櫛目三筋文壺	12世紀中葉	経塚	紫波町
18	比爪館跡	須恵器系甕	12世紀後半	経塚?	紫波町
19	花立地区	常滑複線三筋文壺	12世紀後半	経塚	紫波町
20	大瀬川B	常滑単線三筋文壺	12世紀後半	経塚?	石鳥谷町
21	小瀬川I	須恵器系波状文壺	12世紀末	経塚?	花巻市
22	真行寺経塚	常滑単線三筋文壺	12世紀末	経塚	東和町
23	高松山経塚群	常滑単線三筋文壺 渥美片口鉢 白磁四耳壺	12世紀後半 12世紀 12世紀後半	経塚 経塚 経塚	花巻市 花巻市 花巻市
24	三熊野神社毘沙門山経塚群	須恵器系経筒 常滑複線三筋文壺	12世紀後半 12世紀後半	経塚 経塚	東和町 東和町
25	丹内山神社経塚	白磁四耳壺	12世紀後半	経塚	東和町
26	新山神社	常滑単線三筋文壺	12世紀後半	経塚	北上市
27	高勝寺跡	石櫃	12世紀前半	墳墓?	江刺市
28	万松寺経塚	渥美壺	12世紀後半	経塚	江刺市
29	南部工業団地遺跡K区	渥美刻文壺	12世紀中葉	経塚	北上市
30	伝豊田館跡	白磁四耳壺	12世紀前半	経塚	江刺市
31	大日前	須恵器系波状文四耳壺	12世紀後半	墳墓	江刺市
32	羽黒館跡	常滑複線三筋文壺	12世紀後半	経塚	水沢市
33	三子田経塚	常滑単線三筋文壺	12世紀後半	経塚	水沢市
34	寺ノ上経塚	渥美壺	12世紀後半	経塚	前沢町
35	五輪塚	須恵器系波状文壺	12世紀後半	経塚	前沢町
36	金鶏山経塚	渥美袈裟文壺 常滑単線三筋文壺	12世紀前半 12世紀後半	経塚 経塚	平泉町 平泉町
37	鹿之畑経塚	常滑二筋文壺	12世紀後半	経塚	花泉町
38	高倉東ノ森経塚	常滑複線三筋文壺	12世紀後半	経塚	花泉町
39	大天場山	常滑壺	13世紀初	経塚?	金石市
40	越戸内経塚	渥美全面施釉壺	12世紀前半	経塚	陸前高田市
41	両沢遺跡	常滑櫛目三筋文壺	12世紀中葉	経塚	気仙沼市
42	田 束山経塚	常滑単線三筋文壺	12世紀後半	経塚	歌津町
43	名称なし	常滑三筋文壺	12世紀後半	経塚?	本吉町
44	華足寺	渥美壺	12世紀	墳墓	東和町
45	錦織塚	渥美刻文壺	12世紀	経塚?	東和町
46	若宮山経塚	常滑三筋文壺	12世紀後半	経塚	栗駒町
47	花山寺経塚群	渥美刻文壺	12世紀	経塚	花山村
48	原経塚	常滑単線三筋文壺	12世紀後半	経塚	岩出山町
49	不動山経塚	常滑単線三筋文壺	12世紀後半	経塚	岩出山町
50	伊達神社経塚	常滑単線三筋文壺	12世紀後半	経塚	色麻町
51	八幡山経塚	渥美広口壺	12世紀	経塚	中田町
52	五大堂遺跡	渥美刻文壺	12世紀	墳墓	松島町
53	利府駅前	渥美刻文壺	12世紀後半	経塚?	利府町
54	大門山遺跡	渥美壺	12世紀	墳墓?	名取市
55	大門経塚	常滑複線三筋文壺	12世紀後半	経塚	角田市
56	笹野田遺跡	渥美刻文短頸壺	12世紀	経塚?	丸森町

東北地方の経塚一覧(1)

57	善光寺遺跡	渥美壺	12世紀	経塚	相馬市
58	平沢寺経塚	須恵器系経筒	12世紀後半	経塚	桑折町
59	天王寺経塚	須恵器系経筒	12世紀後半	経塚	福島市
60	木幡山経塚	銅製経筒と石製外容器	12世紀後半	経塚	東和町
61	西田山経塚	渥美壺	12世紀後半	経塚	川俣町
62	東禅寺遺跡	渥美壺	12世紀末	墳墓?	白沢村
63	寺内前経塚	渥美刻文壺	12世紀後半	経塚	双葉町
64	榎内経塚群	渥美壺	12世紀	経塚	双葉町
		須恵器系甕	12世紀後半	経塚	双葉町
65	諸荷経塚	常滑単線三筋文壺	12世紀後半	経塚	いわき市
66	上ノ原経塚	銅製経筒	12世紀後半	経塚	いわき市
67	米山寺経塚群	須恵器系経筒	12世紀後半	経塚	須賀川市
68	松野千光寺経塚	須恵器系甕と壺	12世紀後半	経塚	喜多方市
69	金原古墳	須恵器系波状文四耳壺	12世紀後半	墳墓?	高畠町
70	小松尼ヶ沢経塚	須恵器系波状文壺	12世紀後半	経塚	川西町
71	小松塔ヶ峰	須恵器系壺	12世紀後半	経塚	川西町
72	諏訪	須恵器系波状文壺	12世紀後半	経塚?	川西町
73	二色根古墳	須恵器系波状文壺	12世紀後半	経塚?	南陽市
74	宮宿経塚	須恵器系壺	12世紀後半	経塚	朝日町
75	別所山経塚	銅製経筒	12世紀前半	経塚	南陽市
76	称名寺裏山経塚	銅製経筒	12世紀	経塚	白鷹町
77	笠松山経塚	石製外容器と銅製経筒	12世紀	経塚	白鷹町
78	谷柏経塚	須恵器系経筒	12世紀後半	経塚	山形市
79	仁田の沢経塚	須恵器系甕	12世紀後半	経塚	山形市
80	普広寺山経塚	須恵器系経筒	12世紀後半	経塚	山辺町
81	大森山経塚	須恵器系甕	12世紀後半	経塚	山形市
82	立石寺2号経塚	銅製経筒	12世紀後半	経塚	山形市
83	高瀬山経塚	須恵器系甕と壺と経筒	12世紀後半	経塚	寒河江市
84	平塩経塚	須恵器系経筒	12世紀	経塚	寒河江市
85	大森山経塚	須恵器系甕と壺	12世紀後半	経塚	東根市
86	取上	常滑櫛目三筋文壺	12世紀中葉	墳墓?	尾花沢市
		須恵器系甕	13世紀前半	墳墓?	尾花沢市
87	羽黒山頂経塚	須恵器系甕	12世紀後半	経塚	羽黒町
88	高寺	須恵器系壺	12世紀後半	墳墓?	羽黒町
89	柳沢A	須恵器系甕	12世紀末	墳墓	櫛引町
90	田川蓮華寺	須恵器系片口鉢	13世紀	墳墓	鶴岡町
91	城山経塚	須恵器系壺	12世紀後半	経塚	鶴岡町
92	七日台墳墓群	須恵器系甕と壺	12世紀後半	墳墓	鶴岡市
93	湯田川経塚	須恵器系甕	12世紀後半	経塚	鶴岡市
94	井岡	須恵器系波状文四耳壺	12世紀後半	経塚	鶴岡市
95	神社口墳墓	須恵器系甕と鉢	12世紀後半	墳墓	鶴岡市
96	西目金山経塚	須恵器系甕と経筒	12世紀後半	経塚	鶴岡市
97	水沢城の下墳墓	須恵器系波状文四耳壺	12世紀後半	墳墓	鶴岡市
98	山寺経塚	須恵器系波状文四耳壺	12世紀後半	経塚	松山町
99	長根墳墓	須恵器系波状文壺と鉢	12世紀後半	墳墓	平田町
100	経ヶ蔵山経塚	須恵器系甕	12世紀後半	経塚	平田町
101	鷲尾山A経塚	須恵器系経筒	12世紀後半	経塚	酒田市
102	城輪柵跡	須恵器系波状文四耳壺	12世紀後半	経塚?	酒田市
103	楯の腰経塚	須恵器系甕	12世紀後半	経塚	八幡町
104	蕨岡	須恵器系壺?	12世紀前半?	墳墓?	遊佐町
105	松岡経塚	須恵器系甕	12世紀末	経塚	湯沢市
106	高寺遺跡	須恵器系波状文双耳壺	12世紀後半	経塚	羽後町
107	大沢森経塚	須恵器系甕	12世紀後半	経塚	雄物川町
108	北野1号経塚	須恵器系甕	12世紀後半	経塚	雄物川町
109	観音寺経塚	須恵器系甕	12世紀中葉	経塚	大森町
110	鯛花山遺跡	須恵器系片口鉢と壺	12世紀後半	経塚?	大森町
111	閑居長根1号経塚	須恵器系波状文四耳壺	12世紀後半	経塚	横手市
112	長者館経塚	須恵器系甕	12世紀後半	経塚	河辺町
113	日吉神社跡	須恵器系波状文壺	12世紀末	経塚?	秋田市
114	切石遺跡	須恵器系波状文四耳壺	12世紀後半	経塚	二ツ井町
115	五輪台経塚	須恵器系甕と片口鉢	12世紀後半	経塚	二ツ井町
116	長森遺跡	須恵器系甕と四耳壺	12世紀後半	経塚	大館市

東北地方の経塚一覧 (2)

(2)出土遺物

須恵器系陶器主体となる分布圏は、概ね奥羽山脈の西側に限定される。一部当てはまらない地域は、津軽半島の伝山王坊跡と山形県尾花沢市の取上遺跡である。前者から出土したのは、平泉藤原氏が滅亡後にあたる12世紀末葉と考えられる古瀬戸草創期無釉四耳壺である。同時期の古瀬戸は、鎌倉からわずかに発見されているに過ぎない⁹⁾。平泉が常滑の生産を軌道に乗せたように、古瀬戸は鎌倉が隆盛させたとも考えられている。津軽地方は平泉藤原氏が重要視した地区である¹⁰⁾。その支配者が滅亡したということは陶磁器の流通形態が変化した、すなわち新たな支配者である鎌倉御家人が持ち込んだものとも考えられようか。

取上遺跡からは常滑三筋文壺が出土している。これは尾花沢市が出羽国ではなく陸奥国の範疇であったことに起因しているようだ。出羽国には東海産陶器が納置された経塚は皆無である。非常に興味深い。対して太平洋側では、東海産陶器が主流になる。しかし須恵器系陶器も散見される。つまり東海産陶器は出羽には皆無だが、須恵器系陶器は他地域にも侵入しているのである。おそらく須恵器系陶器の生産者でもあった出羽国の豪族たちは、一定量の生産力もつけていたことから、東海産陶器の侵入を拒んだのではないだろうか。現在は山形県に位置するが、かつては出羽国であった尾花沢市に、常滑三筋文壺が納置されていた事実は、国境によって陶磁器流通が厳格に守られていた証であろう。

この頃の太平洋側には、僅かな窯しか存在していない。生産力が乏しいこの地域は、東海産陶器が進出するには絶好の地区だったのである。東海産陶器の流通範囲は、北は七戸町までである。須恵器系陶器も奥羽山脈を越えねばならないというハンデはあるものの、同様の理由から流通したのである。

白磁四耳壺が納置された経塚は、岩手県南部3基しかない。非常に特殊な事例なのである。当時の最高級品は白磁四耳壺であった可能性が高い¹¹⁾。平泉藤原氏の介入を想像せざるを得ない。渥美刻画文壺と全面施釉壺も岩手県内と花山寺経塚からしか出土していない。盛岡市付近から宮城県北までは、高級と推定される陶磁器が多いのである。

経塚比率からいうならば経筒は、岩手県と宮城県に極端に少ない。対して山形県は多い。経筒の少ないことが、岩手と宮城における紀年銘経塚を皆無にしているのである。両者が外容器に用いる陶器が須恵器系と東海産に異なる理由は、流通の問題であると前記した。しかし経筒の有無は、経塚の造営形態が異なるということである。それぞれ別の地区から、出羽と陸奥に経塚が伝播した可能性がある。

(3)時間的な広がり

12世紀前半の経塚は、岩手県盛岡市1例、江刺市2例、平泉町1例、陸前高田市1例、福島県いわき市に1例、山形県南陽市1例しかない。岩手県に群を抜いて多いことが判る。中葉になると岩手県内には矢巾町と紫波町と北上市に4例、宮城県気仙沼市1例、山形県尾花沢市と遊佐町に1例、山形県大森町1例と、前半とあまり変わらない状況である。宮城県は実測図が掲載されていない渥美が多いため、若干この時期のものが増えるかもしれない。そして後半には東北全体に広がるのである。岩手県には前半から経塚が多いのに対し、山形県は後半に一挙に多くなるのである。霊場や修験といった山形の宗教的な空間の成立は、12世紀後半である可能性が示唆された。

(4)墳墓

墳墓は山形県鶴岡市近隣に集中する。日本海に面した鶴岡市には、平泉藤原氏に与力した田川一族がいた¹²⁾。非常に平泉とも深いつながりがあった地区である。12世紀後半に位置付けられる塚墓は、全国的に見ても初現に近い。平泉との関係からそれらの出現を解釈することは容易いが、どうにも証拠不足であろう。何よりも本拠である岩手県内での例がないからである。

近年の踏査により、中尊寺蓮台野や比爪館跡近隣に塚墓らしき積石塚が存在することが判明している。しかし未調査であるため結論は急げない。現状としては、鶴岡市から遊佐町にかけては、最上川や赤川といった河川の河口が集中することから交通の要衝と考えられるし、ランドマーク・霊山としての鳥海山、また蔵岡や修験の羽黒山も近くにそびえる。交通の要衝と霊場から、いち早く塚墓が出現したと、とりあえず考えたい。

火葬の風習もまさしく霊場と深いつながりがあることは疑いない。羽黒山頂御手洗池からは、数百面の和鏡が出土している。これら大量の和鏡は、京都の貴族に頼まれた修験が納置したものだという¹³⁾。京都との往来がそれほどあったという証である。往来した修験が、火葬の風習と塚墓を伝えたとしても、何ら不思議はないだろう。

3. まとめ

東北地方の12世紀の経塚は、北上川流域、山形県南部、秋田県南部に集中している。北上川流域の経塚は、近隣に12世紀の遺跡が少ないことから、寺院や居館に伴うものではないと想定された。北上川という交通の大動脈を護るためのものだった可能性が高い。平泉藤原氏による交通路の維持管理による造営だったのであろう。対して山形県南部や秋田県南部には、12世紀の大遺跡が発見されている。北上川流域とは異なった目的で造営された経塚なのである。

出土遺物からも両者は大きく異なる。出羽地方は完全なる須恵器系陶器流通圏である。陸奥地方は東海産陶器の流通範囲だが、若干ながら須恵器系陶器も混じる。これは生産力のある窯の有無が起きている状況と想定された。興味深いのは、両者に同様の輸入陶磁器が一定量存在することである。輸入陶磁器が太平洋航路で出羽地方に入るならば、必ず東海産陶器も侵入するだろう。入っていない事実からは、どこか途中で東海産陶器を分離したものか、または東海産陶器を積みこまない日本海航路で輸入陶磁器が搬入されたということだろう。須恵器系陶器の量からは、当然だが後者である可能性が高い。このように類推すると、両航路は交わらず互いに独立していたとも考えられる。平泉に比較的多い須恵器系陶器は、やはり陸路で運ばれたものなのかもしれない。

もうひとつ重要なのは、勧進僧が経塚造営に関わったにしても、使用する陶磁器は自身が遠隔地から運んだものではなく、近くにあるものを使っていたということである。無数の和鏡を都から羽黒山頂御手洗池に運んだ修験や勧進僧にしては、東海産陶器はまったく持って来なかった。こうなると行く先々で勧進僧が経塚造営を行ったということ¹⁴には、再考の余地が出てきたように感じる。

白磁四耳壺が納置された経塚は、岩手県内に3基しかない。渥美刻画文壺と全面施釉壺も岩手県と宮城県にしかない。岩手県から宮城県北にかけては、高級陶磁器を納置した経塚が多いのである。しかし逆に経筒を用いた経塚はほとんどない。経筒を有無は経塚の造営形態に関わる問題である。時間的な経塚の広がりも両者には差異がある。出羽と陸奥の経塚は、多くの異なる面を有していたのである。

まとめてみたい。北上川流域にはいち早く経塚が営まれた。高級陶磁器の存在からも、平泉藤原氏の介在なくしては成し得ないことである。そのエリアは宮城県北まで広がる。出羽地方では平泉とは別の地区から経塚を持ち込んだ。経塚造営の目的も異なっている。平泉に組する豪族であってもその形式は保たれ、平泉同様にはならなかったのである。この辺に出羽の自意識を感じずにはいられない。

おわりに

最初に記した通り、経塚は大半が偶然に発見されるために、細かな検討が行えない。墳墓との識別や石室の構造など判らないものが多い。そのためだけではないが、非常に大雑把な話になってしまった。何とかご容赦願いたい。

註

1. 日本考古学協会『都市・平泉一成立とその意味―』2001年度盛岡大会研究発表資料集2001年
2. 鎌田勉「岩手県内の経塚の検証2」『岩手考古学』第9号岩手考古学会1997年
3. 八重樫忠郎「陶磁器の声」『白い国の詩』東北電力株式会社2002年
4. 赤羽一郎「中世陶器の流通」『中世の風景を読む』第3巻新人物往来社1995年
5. 相原康二「岩手県陸前高田市矢作町出土の経壺について」『岩手県立博物館研究報告』第17号1999年など一連の陶磁器集成の論文の中で、相原氏は常に同様の指摘をしている。
6. 水戸弘美「三条遺跡・高瀬山遺跡出土の陶磁器」『東北の貿易陶磁』日本貿易陶磁研究会1997年
7. 五十嵐一浩「観音寺廃寺」『日本貿易陶磁研究集会資料集』日本貿易陶磁研究会2001年
8. 『吾妻鏡』文治六年一月六日条
9. 藤澤良祐「京・鎌倉における古瀬戸の流通」『京・鎌倉出土の瀬戸焼』(財)瀬戸市埋蔵文化財センター1995年
10. 八重樫忠郎「平泉藤原氏の支配領域」『平泉の世界』高志書院2002年
11. 八重樫忠郎「輸入陶磁器からみた平泉」『貿易陶磁研究』No.17日本貿易陶磁研究会1997年
12. 川崎利夫・佐藤禎広「山形県内の中世陶器について」『山形史学研究』第13・14号1978年
13. 前田洋子「羽黒鏡と羽黒山頂遺跡」『考古学雑誌』70巻1号1984年
14. 赤羽一郎『常滑焼』ニュー・サイエンス社1982年

平泉出土土器の認知考古学的研究

前 川 要

はじめに

平泉の土器（註1）は、従来多くの研究者によって平安京あるいは中世京都の土器と、形態のみならず製作技術まで類似しているといわれている（松本建速1994、1998など）。それでは、果たして色調も類似しているのだろうか。

従来、考古学において土器の色調の研究はあまりされていない。松本直子は、認知考古学という側面から九州の縄文時代晩期から弥生時代初期の土器の色調と器壁の厚さを分析して、晩期前半に朝鮮半島から大きな文化的インパクトがあったことを明らかにした（松本直子1999、2000）。それは、縄文時代晩期から既に人々は土器の色調や器壁の厚さを意識して使用していたことを提示したものである。

本稿では、認知考古学の意義を若干論じた後、平泉における土器の色調を実際に計測して平安京あるいは中世京都の土器と比較することにより、平泉の土器様式の画期について問題提起してみたい。

1. 本研究の意義

（1）認知考古学の意義と本稿の立場

人間の認知的側面は考古学において長い間関心を集めてきた問題であるが、主に欧米のプロセス考古学派によって「認知というような人間的要因は主観的である」という理由で考古学的分析として用いることは困難であると考えられてきた。換言すれば、人間の精神や観念といったものを取り扱えば、「科学」ではなくなるということであった。それに対して、ポストプロセス学派のイアン・ホッダーは「文化は意味深く構成されている」という主張から考古学的な研究において意味を重視する必要性を唱導した。そして科学性が重視されるあまりに人間の精神や観念の研究が軽視されるのはおかしいとした。それに対して、プロセス考古学派は、ポストプロセス学派の主張を採用して、客観的な科学性を保持しながら意味を考察するという方向性に転換しつつある（Renfrew and Bahn, 1996）。

さらに、心理学における認知意味論の視点に立てば、「対象が人間の関わるものである場合、そこから人間的な要因を出来るだけ排除するのはなくて、人間がそれとどう関わるのかという形で焦点を人間の方へ移す」（ジョージ・レイコフ1993）ことが重要である。

本稿においては、客観的な科学性を保持しながら意味を考察するというプロセス考古学的な立場をとり、土器の認知考古学的分析に必要な色調と土器の器壁の厚みという要素のうち、計量的手法を使用して色調に着目して分析を進める。

（2）土器の色調研究に期待される点

・編年研究への寄与

土器の色調研究に期待される点は、土器研究では考古学者はまず、年代を明らかにすることを期待する。土器の形態や組成の変化を考えて年代を明らかにしたいと考える。平泉の土器の編年を考えていく上で土器の色調研究は大変役立つ。

しかしながら、ある人は、土器の色調はただ単に焼成時の技術的なものに規制されているため、同様の焼成技法で焼いたらそうなるためあまり大した意味はないというかもしれない。本稿においては、古代末期から中世初頭にかけての平泉の人々は、色彩感覚豊かに暮らしておりある色調に作法＝規範性を意味深く認識していたのではないかと想定した。

・視覚的効果を考える

ところで、現代人の私たちが食事をする時、食器の色調を大変意識するものである。当時の平泉の人々もかなり意味深く意識的に使用していた。また、羽柴直人による土器の使用法の想定（羽柴2001a）に依拠すると、少なくとも柳之御所成立当初から、京都の儀礼方法が採用されていたことが判明する。勿論、京都から土器製作について形態の情報さらには、色調の情報が伝わってきた。もし儀礼に作法＝規範性があるのならば、色調についても規範性があるのではないかと推測したがこの点については後述する。

2. 測定方法

（1）従来の方法の問題点と土色計の使用

約15年前頃に近畿地方の発掘現場の土層断面観察において、土色帳が使用され始めた。そこでは、マンセル表色系（註2）が利用された。しかしながら、判断するのは人間の眼であり、計測者によって、あるいは男女によって差が生じる。

色調を計る客観性を保持するため今回使用したのが、土色計（MINOLTA SPAD-503）（第8図）である。これを使用すれば、Lab表示により正確な測定ができる。Lab表示とは、彩度と色相をa（R-G軸）、b（Y-B軸）の2つのパラメータで表わし、それに明るさ（K-W軸）を加えてできたカラースペースをいう。さらに、今回私が使った方法は、便利なソフト（株式会社 コアサイエンス社・彩Check）（註3）（第7図）を使ってコンピュータ（Windows系のみ）に取り込むことが可能なものである。

（2）問題点

・遺構の性格による差

土器の色調を考える際、遺構による還元の度合いの問題が生じるが、今回は井戸下層出土資料をできる限り使用することとした。しかし、土器の表面を観察すれば、どの部分が本来の色調かを見分けることは比較的容易であり、調査時に可能な限り本来の色と想定できる部位を計測した。

・土器の色調むらと計測部位

土器の表面は、時に部分的な色調むらが存在する。縄文土器や弥生土器では、かなりの焼きむらがあるが、当該期の土器には比較的それは少ない。このことは、土色計を使用して古代・中世の色調の計量を実施する上で最も有利な点である。

さらに、今回使用したMINOLTA SPAD-503には平均化機能があり、3回の計測平均を出してくれる。もし、本来の色調が不明確な場合は、平均することも可能である。

計測部位は、主として内面を使用する。まずは、製作技術としては、当該期の土器は底部が還元焰焼成になっていることが多い。次に、土器の色調認識が使用時に内面に向けられることが多いからである。

3. 平泉の土器の色調と中世京都の出土土器の比較検討

（1）平泉の土器を計る

今回は、上記土色計を使って平泉の土器の色調について調査した。特に、羽柴直人の編年（羽柴2001a）に従って、12世紀代の平泉の土器を古い順に52SE10（第1図、第9図1）（1期、1101～1115年頃）（岩手県教育委員会2001）、中尊寺金剛院下層（第2図、第9図2）（2期、1116～1130年頃）（平泉町教育委員会1994a）、52SE7（第3図、第9図3、4）（3期、1131～1145年頃）（岩手県教育委員会2001）、50SE3（第4図）（4期、1146～1160年頃）（岩手県教育委員会2000）、52SE8（第5図、第10図）（6期、1176～1189年頃）（岩手県教育委員会2001）の5つの遺構を分析した（註4）。以下の期の表記は羽柴編年を使用している。

その結果、1期の頃は明るさの偏差が見られ色調も黄色のものから赤色のものまで多様である。2期では偏差が小さくなる。3期ではやや偏差が見られるもののやや黄色の方向に変化する。4期は、京都系土師器が導入される時期であるが、より暗く黄色くなるつまり還元焰傾向が強くなる。そして平泉の最終段階つまり6期ではかなり明度がまとまることが判明する。

(2) 平安京・中世京都の土器と比較する

そこで、その当時12世紀後半代の京都の資料と比較する。京大教養部構内AO21区SE6（第6図、第11図）（京都大学埋蔵文化財研究センター1983）のものをみると、あまり明度の偏差は少なくむしろ明るい方向にまとまっており、さらにやや赤い方向にまとまっていることが判明した。平泉の土器と比較すると、12世紀前半、京都系土師器が導入される以前＝3期以前の中尊寺金剛院下層や52SE7の土器と傾向が似ていることが判明した。

4. 結語

(1) 京都系土師器導入以前

12世紀前半の柳之御所成立の際から既に京都の土器の色調を意識して製作・使用していることが判明してきた。つまり「正しい作法」＝規範性に少なくとも平泉成立当初から志向していたと考えられる。ここで興味深いことは、羽柴が指摘している『信貴山縁起絵巻』や『伴大納言絵巻』の高杯の使用例が52SE10の組み合わせとよく似ている事実（第12図）は、まさに京都の「正しい作法」＝規範性との関連性を示している。

(2) 京都系土師器導入以降

それでは、京都系土師器が導入された頃は、「正しい作法」＝規範性が薄かったのかという点を検討したい。

土器の製作技術や形態が酷似していることから、ある段階で京都から少数人数の土師器作りの工人が連れてこられて、その後、彼らの技術指導のもと地元の土器工人を組織的に造り替え、大量生産のために平泉独自の構築窯をつくって還元焰で焼成したのではないか、その際あまり、色調は意味深く意識されてはいなかったのではないかと考えている。この段階では、明確な京都の「作法」＝規範性が崩壊していれば中世平泉化していたと考えられる。

古代の土器の規範性といえば、『延喜内膳司式』供御料雑記の食器の序列の記載が挙げられる。そこには金銀朱漆瓷雑記

という記載が見られる。これは、金銀朱漆瓷は天皇が使用する器の種類を規定したものであり、朱漆という色調を示した記述が見られる。これは、平安時代初頭から見られる食器階層の頂点を示すものと理解されており、平安時代の特徴的な土器様式とされている（高橋1997）。

(3) 色調から見た時期区分と柳之御所遺跡の画期

もし、平安京・京都の土器の色調が同じ時代の平泉における12世紀前半から半ばのものと似た傾向にあり、その後4期頃に京都系土器が出現して古代的な規範性が崩壊するとなると、色調から見た平泉における中世の開始期は、4期からという理解になる。この点については今後検討していかなければならない課題である。

近年示された羽柴が提示した土器編年とそれに基づいた遺構の変遷観（羽柴2001b）は、従来の柳之御所遺跡の評価を大きく変えた。つまり、従来は柳之御所の中心年代は、12世紀後半という理解であったが52SE10：1期を12世紀初頭まで遡らせることになった。そして、遺跡の時期を大きく前後2時期に区分し

ている。つまり、安倍・清原の環壕集落の系統を引き継ぐ環壕集落の段階と、4期になって環壕集落の堀の意義が消失して維持管理が行われず、周回道路が成立して大量の土器廃棄が実施される段階と2時期として把握できることになった。

また、八重樫忠郎のフォーラムでの発表（八重樫2002）でも平泉セット（手づくね土器・東海産甕・壺・白磁四耳壺）の分布が、津軽外が浜まで広がるのを文献資料では清衡段階としていたものを、4期以降とした。さらに吉田欽も柳之御所遺跡での建物形式に着目して、長方形の建物から正方形型の武家住居へ中心域の移動とともに変化していくことを論じた（吉田2002）。年代については述べていないが12世紀後半の可能性が充分存在する。このように考えれば、4期から5期ごろに大きな都市構造、流通システム、土器への認知に大きな変革があったことが想定できる。これらの近年判明してきている考古学的事実は、平泉における古代的要素の払拭と中世の開始と評価できるかもしれない。今後遺構論も含めた詳細な検討を行っていきたい。

おわりに

筆者は中・近世考古学における認知考古学の展望は明るいと考える。それは、古代・中世の色調の計量を実施する上で先史土器と比較して土器の焼きむらが少なく、計量に誤差が生じにくいからである。

平泉の土器は単に食器としての機能的用途のみを考えてはいけない。常に儀礼と関係してなんらかの「作法」＝規範性が存在することを念頭におくべきであろう。今回提示した計量的方法を使って、平泉の土器のみならず、今後日本の古代・中世の土器がその当時どのように認知されていたか、言い換えればその当時の「正しい作法」＝規範性を意味深く分析することが可能となる。さらに土器文化のみならず、近い将来中世社会における色彩感覚がどのようなものであったかをも研究することが可能となるであろう。

<註>

（註1）本稿では、宇野1997に準拠して、「土器」という呼称法を使用して「土師器」「かわらけ」という名称は使用しない。

（註2）マンセルカラー表色系とは、アメリカの画家であり美術の教師であったアルバート・H・マンセル（1858-1918）が1905年に発表した表色系のこと。その後、アメリカ光学会（OSA）により改良され、現在のマンセル表色系が確立された。マンセル表色系は色調を3つの属性、すなわち色相、明度およびクロマ（Chroma；（C）；色の鮮やかさ）で表現する。

（註3）詳細については株式会社 コアサイエンス社のホームページ、<http://www.core-science.co.jp>をご参照いただきたい。

（註4）今回計測した生データは、制限紙数の関係上全てを掲載できないことをお断りしておく。

<参考文献>（50音順）

ジョージレイコフ著、池上嘉彦・河上誓作訳1993『認知意味論』紀伊国屋書店。

岩手県教育委員会2000『柳之御所遺跡－50次発掘調査概報－』岩手県文化財調査報告書107集。

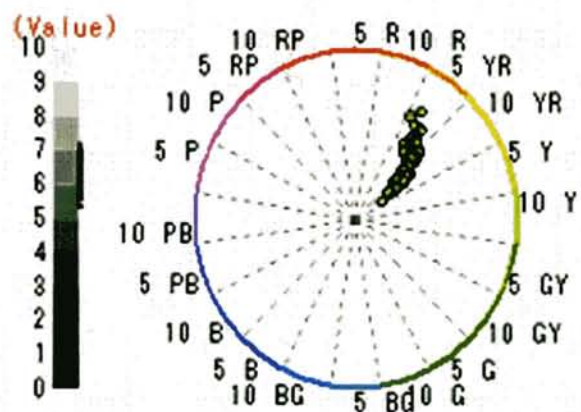
岩手県教育委員会2001『柳之御所遺跡－52次発掘調査概報－』岩手県文化財調査報告書111集。

宇野隆夫1997「中世食器様式の意味するもの－計量分析による使用方法の復元－」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集。

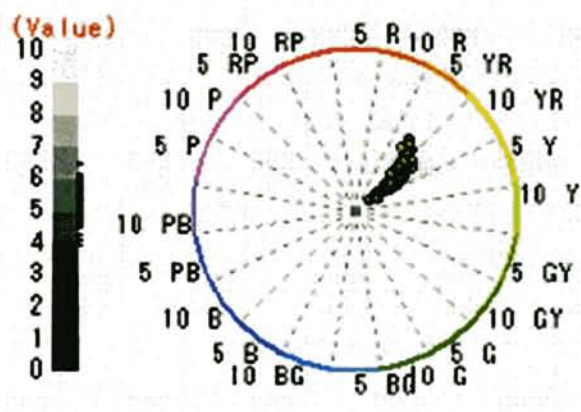
京都大学埋蔵文化財研究センター1983『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和56年度。

- (財)岩手県埋蔵文化財センター1995『柳之御所跡―第21・23・28・31・36・41次発掘調査―』岩手県埋蔵文化財調査報告書第28集。
- 高橋照彦1997「「瓷器」「茶碗」「葉碗」「様器」考―文献にみえる平安時代の食器名を巡って―」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集。
- 羽柴直人2001a「平泉遺跡群のロクロかわらけについて」『岩手考古学』第13号、41～62頁。
- 羽柴直人2001b「平泉を構成する地割」『都市・平泉―成立とその構成―』日本考古学協会2001年度盛岡大会研究発表資料集。
- 富山大学人文学部考古学研究室2002『津軽唐川城跡―古代環壕集落の調査―』。
- 平泉町教育委員会1992『平泉遺跡群発掘調査報告書―伽羅之御所跡5次―』平泉町文化財調査報告書第29集。
- 平泉町教育委員会1994a『特別史跡中尊寺境内金剛院発掘調査報告書』平泉町文化財調査報告書第53集。
- 平泉町教育委員会1994b『柳之御所跡発掘調査報告書―平泉バイパス―関連遊水地関連遺跡発掘調査―』平泉町文化財調査報告書第38集。
- 松本建速1994「ロクロかわらけと手づくねかわらけ」『岩手考古学』第6号。
- 松本建速1998「12世紀代東北地方におけるかわらけ存在の意味」『中近世土器の基礎研究XⅢ』。
- 松本直子1999「認知考古学は人・モノ・社会の新しい関係を考える」『はじめて出会う日本考古学』有斐閣。
- 松本直子2000『認知考古学の理論と実践的研究』九州大学出版会。
- 八重樫忠郎「平泉藤原氏の支配領域」『第2回平泉文化フォーラム資料』。
- 吉田 欽「白河・鳥羽・平泉」『第2回平泉文化フォーラム資料』。
- Renfrew C., and Bahn P. 1996, *Archaeology: Theories Methods and Practice*, Thames and Hudson, London.

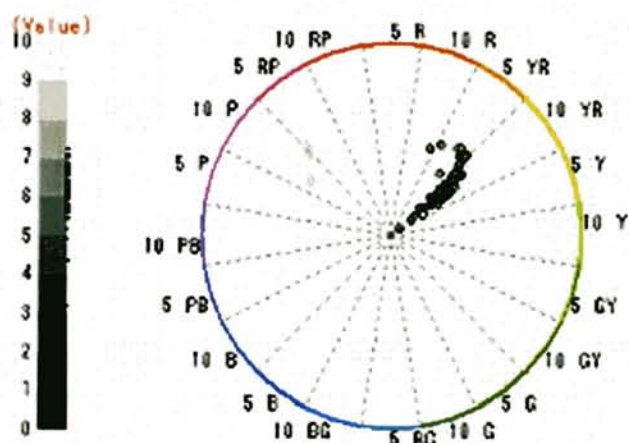
<謝辞>出土遺物の実見に際して、羽柴直人（財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター）、本澤慎輔・八重樫忠郎・及川 司（平泉町教育委員会）、清水芳裕（京都大学埋蔵文化財センター）の各氏に配意とご教示を頂戴した。末筆ながら記して感謝する次第である。



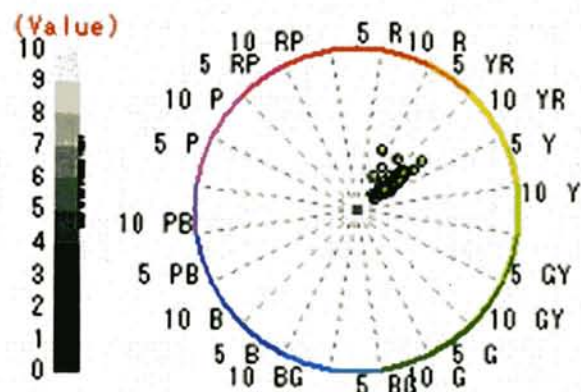
第1図



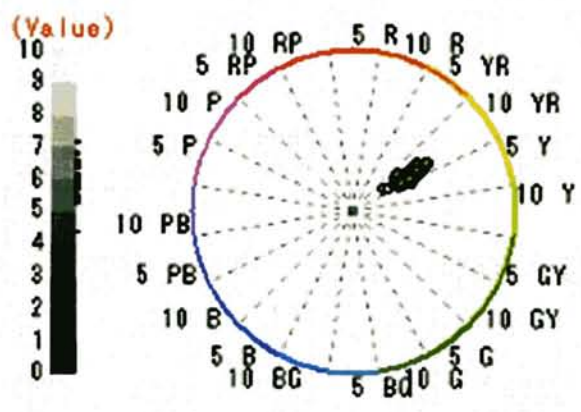
第2図



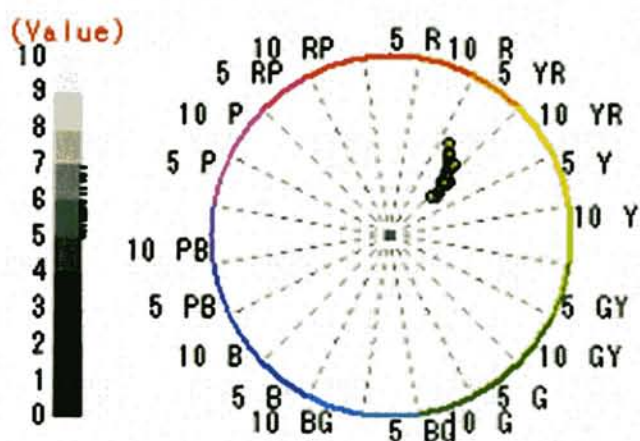
第3図



第4図



第5図



第6図

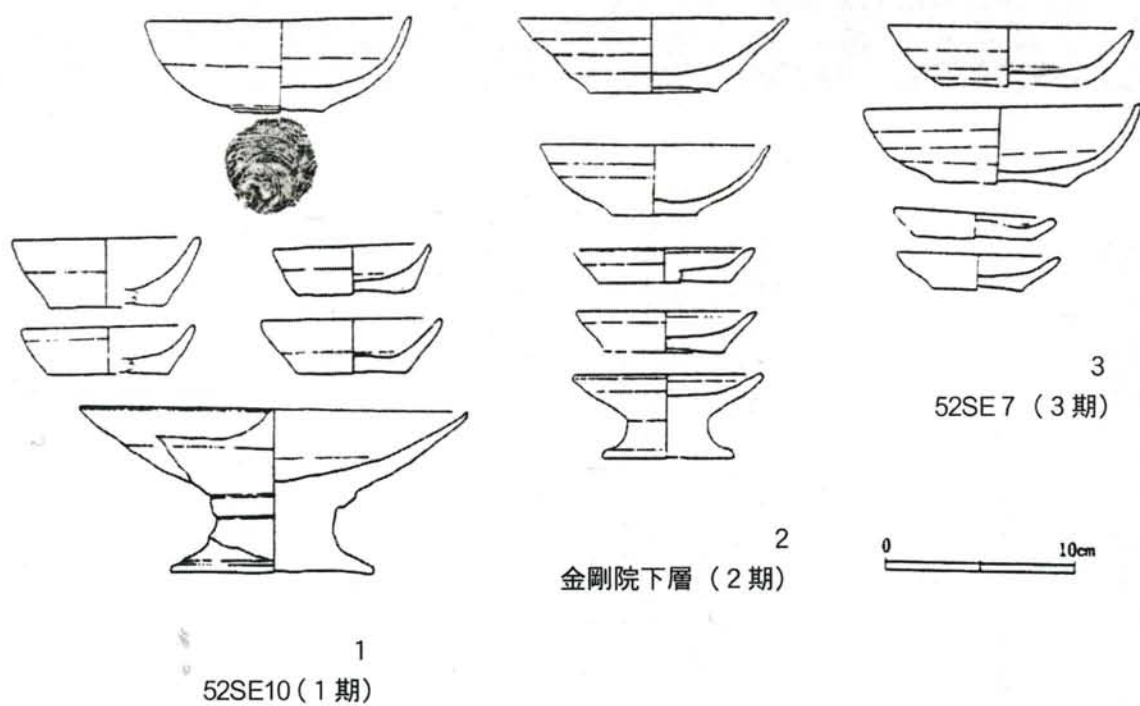
第1図：52SE10、第2図：金剛院下層、第3図：52SE7、第4図：50SE3、
第5図：52SE8、第6図：京大教養部構内AO21区SE6

彩CHECK - [D-M手帳V50SE3.S04]													
基本データ 色名 色番号 統計 色相 表示 設定 単位 単位 単位 単位 単位 単位 単位 単位													
No	色名	色番号	色相	色度	明度	L*	a*	b*	dL*	da*	db*	XYZ-X	XYZ-Y
基準色		0											
最小													
最大													
平均													
標準偏差													
1		1											
2		2				2002/02/13	09:18:12	60.90	12.20	11.60		30.09	29.1
3		3				2002/02/13	09:18:36	64.00	8.10	10.10		33.34	32.1
4		4				2002/02/13	09:19:20	48.20	4.90	10.10		16.83	16.1
5		5				2002/02/13	09:19:31	60.70	5.90	14.00		26.74	26.1
6		6				2002/02/13	09:19:46	55.20	4.40	8.10		22.88	23.1
7		7				2002/02/13	09:20:19	55.70	3.50	15.00		23.16	23.1
8		8				2002/02/13	09:20:58	54.80	3.40	9.60		22.29	22.1
9		9				2002/02/13	09:22:52	56.20	5.90	10.50		24.05	24.1
10		10				2002/02/13	09:23:03	47.50	3.10	8.10		16.09	16.1
11		11				2002/02/13	09:23:32	48.00	2.70	7.60		14.82	15.1
12		12				2002/02/13	09:23:43	56.20	1.00	10.00		23.26	24.1
13		13				2002/02/13	09:23:51	64.00	4.50	14.90		32.33	32.1
14		14				2002/02/13	09:24:06	51.40	2.40	9.20		19.06	19.1
15		15				2002/02/13	09:24:17	59.10	6.60	24.20		38.14	38.1
16		16				2002/02/13	09:24:28	58.80	6.20	15.80		26.91	26.1
17		17				2002/02/13	09:24:44	48.90	4.10	13.60		17.34	17.1
18		18				2002/02/13	09:25:13	59.10	5.10	14.20		26.96	27.1
19		19				2002/02/13	09:25:25	45.10	3.50	7.70		14.41	14.1
20		20				2002/02/13	09:25:33	59.30	2.50	11.50		26.53	27.1
21		21				2002/02/13	09:25:54	58.80	2.30	11.10		25.87	26.1
22		22				2002/02/13	09:26:02	60.80	4.80	12.70		29.84	29.1
23		23				2002/02/13	09:26:08	71.40	5.00	18.00		42.18	42.1
24		24				2002/02/13	09:26:14	55.30	5.90	20.70		23.17	23.1
25		25				2002/02/13	09:26:20	45.30	1.70	6.90		14.26	14.1
26		26				2002/02/13	09:26:26	55.00	1.70	9.40		22.10	22.1
27		27				2002/02/13	09:26:49	58.10	5.80	14.80		24.08	24.1
28		28				2002/02/13	09:26:58	72.10	4.20	17.70		42.92	43.1
29		29				2002/02/13	09:27:09	60.90	3.40	14.20		28.48	29.1
30		30				2002/02/13	09:27:21	69.10	4.40	16.40		38.79	39.1
31		31				2002/02/13	09:28:06	59.40	7.00	6.60		27.75	27.1
32		32				2002/02/13	09:28:12	65.10	5.80	12.80		33.95	34.1

第7図 彩CHECKのコンピュータ上の画面



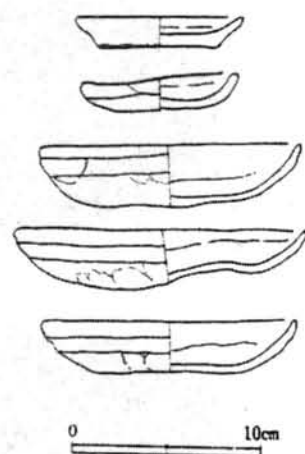
第8図 土色計 (Minolta Spad-503)



52SE7 (3期)

4

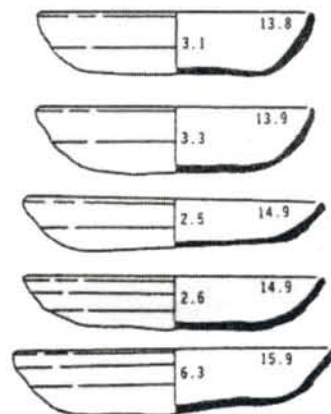
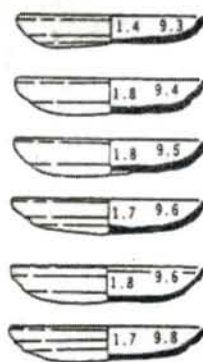
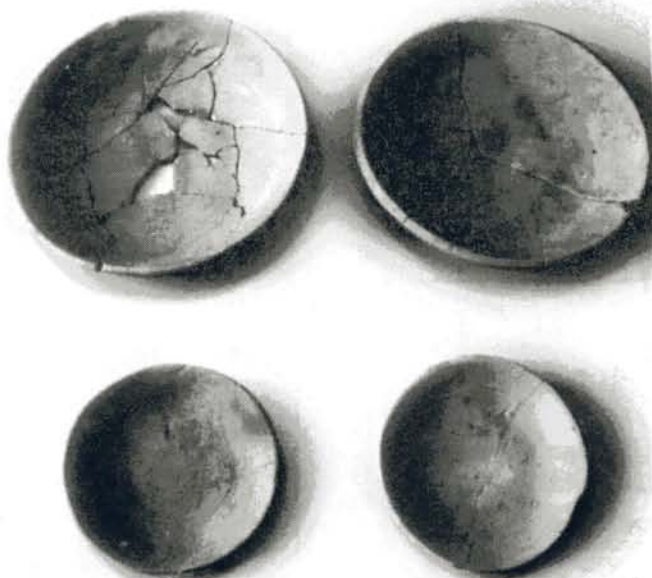
第9図 平泉出土土器 (1～3期)
(1・3は岩手県教育委員会2001、2は平泉町教育委員会1994より)



2

1

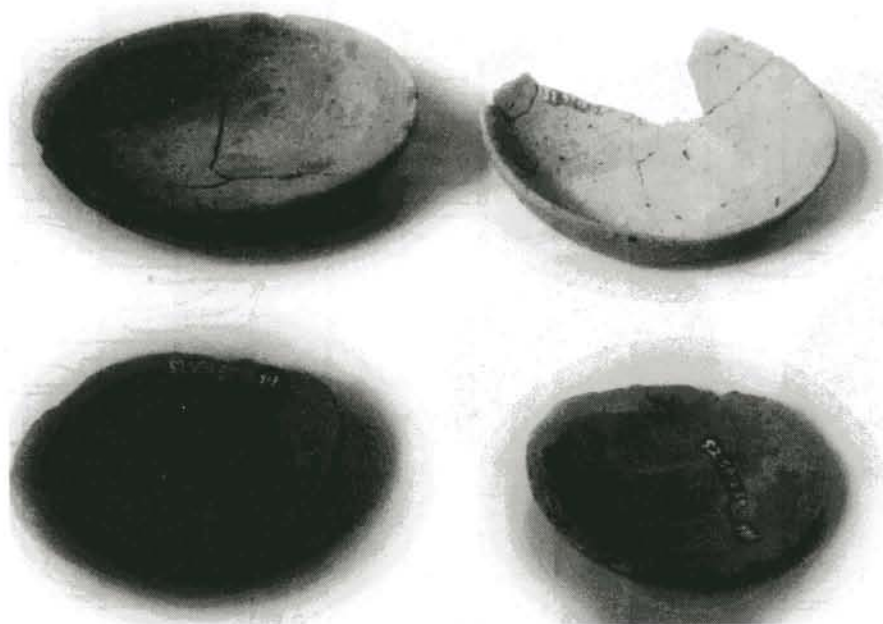
第10図 52SE 8 出土土器（6期）
（2は岩手県教育委員会2001より）



1

2

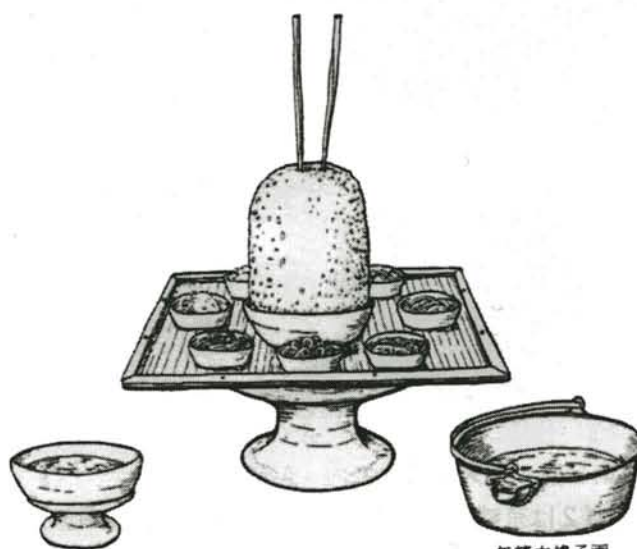
第11図 京大教養部構内 AO21区SE 6 出土土器
（2は京都大学埋蔵文化財センター1987より）



1



2



矢崎木綿子画

3

第12図 52SE10出土土器および使用想定図
(3は羽柴2001より)

平泉文化研究年報 第2号

平成14年3月31日発行

発行 岩手教育委員会

岩手県盛岡市内丸10-1

編集 岩手県教育委員会事務局文化課

印刷 有限会社内外企画印刷

盛岡市肴町8番19号